

第2部 災害予防・応急対策

第1章 活動体制

第1節 組織体制

此花区役所は、市域において災害が発生し、又は発生するおそれのある場合において、災害応急対策を行うための組織及び動員体制を整備する。

1-1 災害対策本部

防災対策の推進を図るため必要と認めるときは、災害対策本部を設置する。

(1) 設置基準

① 此花区災害対策本部（以下「区本部」という。）

ア 大阪市災害対策本部が設置されたとき。

イ その他区長が必要と認めたときなお、この場合は市長に報告する。

(2) 設置者及び設置場所

区長は、区本部を此花区役所内（区役所が被災し、区本部が設置できない場合においては、代替の場所）に設置する。

(3) 組織

区本部の事務を分掌させるために、班及び隊を置く。

班及び隊の名称及び分掌事務等については、別表1のとおりとする。

区本部長は、特に必要があると認めるときは、別表1と異なる編成をとることができる。この場合は遅滞なく市本部長（市長）に報告する。

区本部長は、自主防災組織等その他の団体を区本部の組織に加えることができる。

(4) 区本部長等の職務

① 区本部長（区長）

市本部長の命を受け、区本部の事務を総括し、区本部の職員を指揮監督する。区域内に所在する市立の校園、消防署等に対し、災害対策の遂行に必要な限りにおいて、必要な指示をすることができる。

② 区副本部長（副区長）

区本部長を補佐し、区本部長に事故あるときは、副区長がその職務を代理する。また、副区長が参集できない場合は、総務課長が区災害対策本部長の職務を代理する。

③ 緊急区本部員

勤務時間外に地震が発生した場合、区本部へ徒歩等により30分以内に出勤可能な職員から区長が指名する職員。区本部の運用を行い、区本部長等を補佐する。

(5) 廃止

区本部長は、市本部長が認めた場合に区本部を廃止することができる。ただし、市本部が設置されていないときは、区本部長は次の場合に市長に報告のうえ廃止する。

① 被害の発生するおそれが解消したとき

② 災害応急対策が概ね完了したとき

- ③ その他区本部長が区本部の必要がなくなつたと認めたとき

1-2 此花区災害対策緊急本部

災害により相当規模の被害が発生するおそれがある場合又は発生した場合において、災害対策本部を設置するまでに至らないとき又は設置するまでの間において設置する。

(1) 設置基準

此花区災害対策緊急本部（以下「区緊急本部」という。）

- ① 市緊急本部が設置されたとき
- ② その他区長が必要と認めたとき。なお、この場合は副市長の事務分担等に関する規則第2条第1項の第1順位の副市長に報告する。

(2) 設置者及び設置場所

区緊急本部

区長は、区緊急本部を区役所内に設置する。

(3) 組織

区緊急本部

区緊急本部の事務を分掌させるために、区緊急本部に班及び隊を置く。

班及び隊の名称、分掌事務等については、別表1のとおりとする。

区緊急本部長は、特に必要があると認めるときは、別表1と異なる編成をとることができる。この場合においては、遅滞なく市緊急本部長に報告する。

区緊急本部長は、自主防災組織等その他の団体を区緊急本部の組織に加えることができる。

(4) 区緊急本部長等の職務

① 区緊急本部長（区長）

市緊急本部長の命を受け、区緊急本部の事務を総括し、区緊急本部の職員を指揮監督する。此花区域内に所在する市立の校園、消防署等に対し、災害対策の遂行に必要な限りにおいて、必要な指示をすることができる。

なお、災害時などの緊急時に、臨時的に区緊急本部長の権限を行使できる「代行者」をあらかじめ各区において定め、危機管理室に報告する。

② 区緊急副本部長（副区長）

区緊急本部長を補佐し区緊急本部長に事故あるときはその職務を代理する。

③ 緊急区本部員

勤務時間外に地震が発生した場合、区緊急本部へ徒歩等により30分以内に出勤可能な職員から区長が指名する職員。区緊急本部の運用を行い、区緊急本部長等を補佐する。

(5) 廃止

区緊急本部

区緊急本部長は、市緊急本部長が認めた場合に区緊急本部を廃止することができる。ただし、市緊急本部が設置されていないときは、区緊急本部長は次の場合に副市長の事務分担等に関する規則第2条第1項の第1順位の副市長に報告のうえ廃止する。

- ① 被害の発生するおそれが消滅したとき
- ② 災害応急対策が概ね完了したとき
- ③ 区本部が設置されたとき
- ④ その他区緊急本部長が区緊急本部の必要がなくなったと認めたとき

1-3 災害対策警戒本部

災害による被害が発生するおそれがある場合において、災害対策緊急本部を設置するまでに至らないとき又は設置するまでの間において設置する。

(1) 設置基準

此花区災害対策警戒本部（以下「区警戒本部」という。）

大阪災害対策警戒本部（以下市警戒本部）が設置されたとき

(2) 設置者及び設置場所

区警戒本部

区長は、区警戒本部を区役所内に設置する。

(3) 組織

区警戒本部

区警戒本部の分掌事務については、別表1を準用する。

区警戒本部長は自主防災組織等その他の団体を区緊急本部の組織に加えることができる。

① 区警戒本部長（区長）

市警戒本部長の命を受け、区警戒本部の事務を総括し、区警戒本部の職員を指揮監督する。なお、災害時などの緊急時に、臨時的に区警戒本部長の権限を行使できる「代行者」をあらかじめ各区において定め、危機管理室に報告する。

② 区警戒副本部長（副区長）

区警戒本部長を補佐し、区警戒本部長に事故あるときはその職務を代理する。

(4) 廃止

区警戒本部

区警戒本部長は、市警戒本部長が認めた場合に区警戒本部を廃止する。

区本部の班名称及び分掌事務

庶務班	<ol style="list-style-type: none"> 1 各班の連絡調整に関すること 2 各部、関係機関への応援協力要請に関すること 3 災害対策本部との連絡に関すること 4 予算計理に関すること 5 情報の収集、伝達及び広報に関すること 6 義援金の受付、並びに保管に関すること 7 災害記録に関すること 8 ボランティアの調整に関すること 9 他の班の所管に属しないこと
救助班	<ol style="list-style-type: none"> 1 被災者の応急救助に関すること 2 救援物資の調達保管及び配給に関すること 3 被災証明書の発行に関すること 4 義援金の配分に関すること 5 団体等の協力活動の連絡調整に関すること
避難受入班	<ol style="list-style-type: none"> 1 被災者の受入に関すること 2 避難者の誘導に関すること 3 避難所受入状況の把握に関すること
調査班	<ol style="list-style-type: none"> 1 被害状況の調査に関すること
保健福祉班	<ol style="list-style-type: none"> 1 被災者の医療救護に関すること 2 防疫・保健衛生に関すること 3 区医師会等との連絡調整に関すること
消防班	<ol style="list-style-type: none"> 1 消防に関すること 2 被災者の救急・救助に関すること
協力隊	<ol style="list-style-type: none"> 1 地域振興会、自主防災組織等の区本部災害救助活動に対する協力に関すること
<p>区本部長は、特に必要が認められるときは、この分担表と異なる編成をとることができる。この場合においては、遅滞なく本部長に報告しなければならない。</p> <p>なお、消防班は別表 1 の消防部としての任務に重大な支障のない場合に限り上記編成に従う。</p>	

第2節 動員体制

この計画は地震による被害が発生し、又は被害が発生・拡大するおそれがある場合に応急対策活動を迅速かつ的確に行うのに必要な職員の動員配備を定めたものである。

此花区長は、災害応急対策に従事する者の安全確保に十分留意し、災害の状況に応じた動員計画を定め、所属員に対し動員計画を周知するとともに、所属員の連絡網を整備し、速やかに動員体制がとれるようにしておかなければならない。

職員は、本計画で定める任務分担に応じて速やかに応急対策活動を実施するものとする。

2-1 動員基準

職員の動員基準は、次のとおりとする。

ただし、此花区長は特に必要があると認めるときは、あらかじめ市長の承認を得てこの基準と異なる動員体制をとることができる。

動員基準表

【動員体制一覧】

震度	動員	動員人員	参集場所
震度6弱以上	1号動員	全員	直近参集/ 所属参集
震度5強	2号動員	職員の1/2以内	直近参集/ 所属参集
震度5弱	3号動員	職員の1/4以内	所属参集
震度4	4号動員	初期活動に必要な職員	所属参集

2-2 動員

(1) 勤務時間外における参集

① 震度6弱以上または特別警報が発表された場合

ア 自動参集の基準

全職員は、勤務時間外に本市域において震度6弱以上（気象庁発表）を観測したときまたは特別警報が発表（気象庁発表）されたときは、1号動員の指令があったものとして、速やかに、次に定める区分により参集すること

イ 自動参集の区分

自動参集の区分は、「所属参集」と、「直近参集」とする。

(ア) 所属参集

本計画に定める分掌事務を遂行するうえで特に必要とする職員は、自己の勤務する場所等に自動参集する。

(イ) 直近参集

所属参集以外の職員は、あらかじめ指定された自己の居住地に近い区役所・事業所等に自動参集する。

直近参集者は、参集先の本部長などの指揮の下、初期初動対策にあたるものとする。

② 震度5強の場合

職員は、勤務時間外に本市域において震度5強（気象庁発表）を観測したときは、2号動員の指令があったものとして、自己の勤務する場所等に自動参集すること。

また、上記①（イ）直近参集に該当する者については、あらかじめ指定された自己の居住地に近い区

役所・事業所等に参集する。

直近参集者は、参集先の本部長などの指揮の下、初期初動対策にあたるものとする。

③ 震度5弱の場合

職員は、勤務時間外に本市域において震度5弱（気象庁発表）を観測したときは、3号動員の指令があったものとして、自己の勤務する場所等に自動参集すること

④ 震度4の場合

職員は、勤務時間外に本市域において震度4（気象庁発表）を観測したときは、4号動員の指令があったものとして、自己の勤務する場所等に自動参集すること

⑤ 防潮扉及び水門閉鎖要員の自動参集

防潮扉及び水門閉鎖要員は、勤務時間外に大阪府域に津波警報・大津波警報が発表されたときは、指定された場所に参集し、所定の防潮扉及び水門閉鎖活動にあたること

なお、他の動員と重複した場合は、他に優先すること

⑥ 市本部連絡員・緊急区本部員の自動参集

市本部連絡員・緊急区本部員は、勤務時間外に本市域において震度4以上（気象庁発表）を観測したときは、指定された場所に自動的に参集すること

(2) 動員計画の周知

① 此花区長は、本計画及び此花区役所の動員計画に基づき、所属員に計画内容を周知する。

② 此花区役所は報告を受けた直近参集者の業務内容を取り決め、職員に通知するものとする。

③ 此花区長は、此花区役所が実施する訓練や研修等に所属員及び直近参集者を参加させ、業務内容の理解を深めるように努める。

(3) 動員の指令

① 勤務時間内における指令の伝達

勤務時間内において指令が発せられたときは、此花区長から所属員へ逐次伝達するとともに、必要に応じて庁内放送等を用いて速やかにその旨周知する。

② 勤務時間外における指令の伝達

勤務時間外において、職員は、テレビ、ラジオ等で自ら地震情報を収集し、伝達を待つことなく自動参集基準に基づき参集する。なお、自動参集基準によらない動員指令が発せられたときは、此花区長は直ちに所属員を招集しなければならない。

此花区長は、危機管理監により動員の指令が発せられていない場合において、此花区役所において特に定めた動員体制に従って職員を動員する必要がある場合は、指令を発することができる。

(4) 動員の報告

此花区長は、動員指令に基づいて所属員を招集・参集したときは、その状況をとりまとめ、直ちに危機管理監に報告する。

(5) 応援職員の要請

此花区長は、職員が不足し他部等の職員の応援を必要とするときは、市本部総務部長に要請する。

第3節 防災活動体制の整備

災害時、迅速な災害応急対策を実施するためには、区災害対策本部等の危機管理機能を保持しなければならない。災害は勤務時間内外を問わず発生するものであるため、此花区役所においては、危機管理機能の充実に努める。

3-1 区災害対策本部運用計画の強化

区災害対策本部の施設・設備配置等の改善を行い、災害発生後の迅速な災害対策本部の機能の立ち上げ、防災関係機関等との緊密な連携による災害応急対策、復旧対策の実施を図る。

(1) 必要資機材の事前配備

総合防災情報システム・有線・無線機器及び各種防災図面、災害時の運用マニュアル等の防災用資料を区災害対策関連課等に常備し、災害発生後の迅速な運用開始を図る。

(2) 通信施設の多重化

無線関連設備の増強を図り、災害時の情報機能の拡大を図る。

3-2 初期初動体制の強化

災害時には、職員自身も被災者となり、参集不能となることが予測されることから、此花区の分掌事務を遂行するため、此花区長に代わり、意思決定を行うことができる代行者を指定するとともに、直近参集体制の拡充に努め、初期初動体制の強化を図る。

第4節 災害情報の収集・伝達

此花区は災害発生後、大阪市をはじめ他の防災関係機関と相互に連携協力し、直ちに被害状況の把握及び応急対策の実施のための情報収集及び伝達活動を行う。また、収集した情報の確度や必要とする内容の異同を勘案し、生存情報などの重要度、情報に付された場所・時間の明確性、発信者の属性等の観点から、情報のトリアージを行い、適切な応急対策を実施する。

災害が発生し、又は発生するおそれがある場合、関係機関等の協力を得て此花区の地域にかかる災害の状況等を迅速かつ的確に収集し、これを一元的に取りまとめて分析を行い応急対策活動方針を決定するとともに、防災関係機関相互間の予報・警報その他の災害情報の伝達を迅速かつ的確に実施する。

4-1 情報収集体制と伝達システムの確立

(1) 実施体制

区内における災害に係る情報の収集については、区本部が積極的に行うべきものであることから、あらかじめ情報収集の分担を定めておく。

区本部は、市本部連絡員と災害情報連絡主任（災害情報連絡主任設置規程（昭和49年達第18号）との連絡を密にし、災害対策本部を所掌する危機管理部との災害情報連絡をより緊密化し、応急対策の初動活動の円滑化を図ることとする

(2) 情報収集体制の確立

① 情報の一元管理を図るため、区本部は全庁的なネットワークシステムである危機管理総合情報システムや無線機を活用し、危機管理部に有する情報の報告を行う。

② 災害危険の高い地区及び地理的、情動的に孤立しやすい地区について、区本部は情報収集や広報を行うとともに同報無線の活用等を行い、迅速かつ的確な情報の収集体制を確立する。

③ 地域に無線機を配分し、情報連絡を密にする。

4-2 収集すべき情報

災害時における応急対策活動実施上必要となる情報は、被害状況をはじめとして、各般に及ぶものであるが、災害発生時情報、被害情報及びその他の情報に大別することができる。

(1) 収集方法

職員の勤務時間内に発生した災害に対しては、職員は、自主防災組織等の協力を得て被害調査を実施する。

一方、職員の勤務時間外である夜間・休日等において発生した災害に対しては情報収集活動を実施する前に職員を招集するための活動が必要となることから、災害直後から職員が参集して来るまでの情報収集空白期間をうめるために、自宅等から参集場所へ移動する間に収集した各方面の各種情報は貴重なものとなるので、これらの情報をとりまとめ活用する。

(2) 災害発生時情報

災害発生時情報は、災害の発生拡大状況及び二次災害の危険性に関する情報で、応急対策活動、広域応援等の要請を実施するうえで最も必要とする情報であることから、此花区本部は、あらゆる手段で以下の項目を中心とした情報収集に努める。

- ① 人命危険の有無及び人的被害の発生状況
- ② 火災等の二次災害の発生状況、危険性
- ③ 避難の必要の有無及び避難の状況
- ④ 市民等の動向
- ⑤ 電気、ガス、水道、下水道、電話被害の状況
- ⑥ 建物の損壊状況
- ⑦ 道路交通状況
- ⑧ 公共交通機関状況
- ⑨ 庁舎等所管施設・設備等の損壊状況
- ⑩ その他災害の発生拡大防止措置上必要な事項

(3) 被害情報

被害情報は、災害発生後、事態がある程度落ち着いた段階で扱われる情報であり、上部機関の当該災害に対する応急対策活動をとるうえでの判断材料となるものであるから、此花区本部は速やかに報告し、危機管理部が情報の調整を図れることをめざす。

- ① 被害状況
- ② 避難の勧告・指示又は警戒区域の設定状況
- ③ 避難所の開設状況
- ④ 避難生活の状況
- ⑤ 救護所の設置及び活動状況
- ⑥ 傷病者の受入状況

- ⑦ 応急給水など応急措置の状況
- ⑧ その他

4-3 情報の優先順位

地震発生後の通信運用は、原則として以下の優先順位で行う。

- (1) 第1順位
 - ① 救出、救助、救急活動、医療活動等の人命救助に必要な情報
 - ② 消防、水防活動等災害の拡大防止に必要な情報
 - ③ 応援要請等の判断に必要な情報
 - ④ 上記に関連した緊急輸送に必要な情報
- (2) 第2順位
 - ① 食料や飲料水の供給活動等生命の維持に必要な情報
 - ② 負傷者や被災者等の救助活動に必要な情報
 - ③ 上記に関連した緊急輸送に必要な情報
- (3) 第3順位
 - ① 生活物資の供給活動等被災者の生活再建に関する情報
 - ② 被災地の災害復旧に関する情報

第5節 通信の整備

災害が発生した場合、迅速な災害応急対策を実施するために、区民等の状況など多種多様な情報を収集・伝達することが必要であり、此花区本部内はもとより、大阪市の関係部署や各防災関係機関と緊密に連絡を取り合い、連携することが求められ、そのための通信施設等の整備が必要となる。

これまでも事業を実施しているが、さらに今後もそれらの整備を拡充し、よりきめの細かい、情報収集・伝達を可能とするよう努めていくものとする。

災害時においては、地震情報、被害情報、避難情報等の収集及び災害応急対策活動に必要な指揮指令の伝達など、各種の通信量が飛躍的に増大する。

このための通信の混乱を防ぎ、迅速・的確に処理できるよう無線通信設備の整備・拡充を図っていく。

5-1 無線通信

災害時における地域の情報収集・連絡体制の充実を推進するため、無線設備の整備を図っていく。整備にあたっては、市の統制局（危機管理室）より提供されているMAC無線や衛星電話など様々なシステムを活用するほか、此花区独自の無線網を整備することで地域・自主防災組織等と相互の情報伝達を行うことができるよう努める。

(1) 同報系無線の活用

災害時においては、有線電話の輻輳や不正確な情報によって、流言飛語等が引き起こされる可能性がある。区民等への周知を図るため、市街地及び避難場所等、不特定多数の人が集中する地域に対し、同報系無線を使用し、流言飛語防止のための広報を活発に行うとともに、的確な地震関連情報、生活関連情報を伝達する必要がある。

(2) 地域の防災無線の拡充

区独自で無線を導入し、これを地域防災リーダーや自主防災組織を中心に配備することにより、災害時の迅速な情報収集・発信が行われることをめざす。

(3) 無線従事者の養成

災害時に誰でもが使えるよう日常から無線を使用し、無線操作の習熟を図るとともに、各無線局で無線の使用が可能となるよう無線従事者の養成を図っていく。

5-2 情報の優先順位

地震発生後の通信運用は、原則として以下の優先順位で行う。

(1) 第1順位

- ① 救出、救助、救急活動、医療活動等の人命救助に必要な情報
- ② 消防、水防活動等災害の拡大防止に必要な情報
- ③ 応援要請等の判断に必要な情報
- ④ 上記に関連した緊急輸送に必要な情報

(2) 第2順位

- ① 食料や飲料水の供給活動等生命の維持に必要な情報
- ② 負傷者や被災者等の救助活動に必要な情報
- ③ 上記に関連した緊急輸送に必要な情報

(3) 第3順位

- ① 生活物資の供給活動等被災者の生活再建に関する情報
- ② 被災地の災害復旧に関する情報

第2章 協働協力体制

第6節 自主防災活動

多様な災害時においても災害による被害を防止し、軽減するため、区民等の自主的な活動、すなわち区民等自らが出火防止、消火活動、被災者の救出救護、避難誘導等を行うことができる体制を整備する。

また、地域コミュニティの活性化により、区民等が「自分たちの地域は自分たちで守る」という防災意識を持ち、災害発生時には、地域の人々が互いに協力しあい、助け合い、行動できるよう、「地域防災の輪」として自主防災組織の育成を図るとともに、この「地域防災の輪」の中心となって消火活動や救出救護活動などを実施する「地域防災リーダー」の研修・指導を実施する。

6-1 自主防災組織の活動

(1) 自主防災組織の確立

各地域の範囲で地域活動協議会などを中心とし、地域に居住及び勤務する広範な人員で構成する等、地域を網羅した自主防災組織を確立し、組織の責任者、活動内容などを定め、災害時の安否確認、救護、初期消火、避難行動要支援者支援、津波避難、警報情報等の収集・伝達など自助、共助の取組みを組織的に行うことができるよう防災訓練などを実施し、その実行力の確保に努める。

(2) 平常時の活動

- ① 防災に対する心構えの普及啓発（講習会の開催、ビラの作成など）
- ② 地域における防災訓練の実施（1回／年以上）
- ③ 災害発生の未然防止（家具の安全診断・固定など）
- ④ 災害発生への備え（避難行動要支援者の把握、避難場所・避難路・避難所・津波避難ビル等の把握、防災資機材や備蓄品の管理など）
- ⑤ 災害発生時の活動の習得（情報伝達・避難・消火・救出・救護・応急手当・避難所開設運営・炊き出し訓練など）
- ⑥ 復旧・復興に関する知識の習得

(3) 災害時の活動

- ① 避難誘導（安否確認、集団避難、避難行動要支援者への援助など）
- ② 救出・救護（救助用資機材を使用した救出、負傷者の救護など）
- ③ 出火防止（火の元点検など）・消火活動（消火器、可搬式ポンプなどによる消火）
- ④ 情報伝達（地域内の被害情報や避難状況の市町村への伝達、救援情報などの区民等への周知など）
- ⑤ 物資分配（物資の運搬、炊き出し・給食、分配）
- ⑥ 避難所の自主的運営

6-2 地域防災リーダーの育成

地域における防災機能を強化し活性化するために、地域防災リーダーに対する研修等の育成を行い、災害時に効果的かつ実践的な防災活動が展開できるよう活動の基盤づくりを行う。

地域防災リーダーは、区民等による防災活動の中核となり、災害時に効果的かつ速やかに減災を図るため、日常から自主防災組織体制の確立に努め、「地域防災の輪」を広げる。

6-3 地域防災リーダーへの研修・訓練

地域防災リーダーは、毎年1回以上の研修を受講する。研修の内容は、防災学習及び可搬式ポンプ操作訓練等をはじめとする消火訓練、救出・救護訓練、避難誘導訓練、情報収集訓練、給食給水訓練とする。

また、災害時における市民等の自主救護能力を高めるため、実技を中心とした応急手当の知識と技術に関する講習や、地域の災害特性に応じた災害図上訓練など実践的な訓練の実施に努める。

6-4 地域への無線機の配備

災害時において自主防災活動を支援し、区役所の防災活動との連携を図るため、自主防災組織に無線機を配備し、的確な情報の交換を行う。

6-5 地域への防災用資機材の配備

災害時に自主防災組織が活用する救助用資機材を配備する。その際、地域によりその災害想定や被害想定が異なることにも配慮し、地域特性に応じた必要な資機材等の整備など、きめ細かな対応策を講じる。

6-6 地域防災リーダーへの防災装備の配備

地域防災リーダーに対して、地域の災害特性に応じて必要な防災装備を支給する。

6-7 地域防災リーダーの保険への加入

地域防災リーダーが訓練及び災害救助活動等において負傷等を負った場合に備え、保険に加入し、その損害を補償することにより安心感を高め、より一層の自主防災活動の促進を図る。

6-8 避難行動要支援者への支援対策

避難行動要支援者への支援については、地域の実情に応じた対応ができるよう避難行動要支援者の情報把握、情報伝達、避難支援、避難所でのケアなど、支援全般について検討し、区民が主体となった支援体制の整備に努める。

(1) 安否確認等

災害発生直後、自主防災組織は、避難支援プラン（個別計画）により居宅に取り残された高齢者、障がい者など、避難行動要支援者の安否確認、救出、救護、避難誘導を速やかに行う。なお、支援者は、支援者本人又はその家族等の生命及び身体の安全を守ることが大前提であり、その安全確保に十分に留意した上で、地域の特性や災害の状況に応じ可能な範囲で避難支援行動に努める。

また、区本部は、あらかじめ関係機関と調整し、災害発生時に「大阪市避難行動要支援者名簿」に基づき避難行動要支援者の安否確認、救出、救護を円滑に進めるための協力体制を構築する。

(2) 福祉避難所の開設及び移送

① 区本部は、自主防災組織や要配慮者利用施設管理者の協力を得て、あらかじめ福祉避難所の指定を行い、災害発生時には、災害時避難所に設置される福祉避難室においては避難所運営委員会、その他の施設においては施設管理者の協力を得て福祉避難所を開設する。

② 区本部は、災害時避難所へ避難してきた者のうち、避難行動要支援者については必要に応じ福祉避難所に避難させケアを行う。この際には、自主防災組織、福祉関係機関及びボランティア等に協力依頼する。

③ 入所施設・医療機関への移送

区本部は、自主防災組織の協力を得て、避難行動要支援者の健康状態やニーズ等を踏まえ、医療機関への移送、社会福祉施設への緊急入所などの対策を検討し、市本部とも連携しながら迅速かつ的確に対応する。

(4) 福祉サービスの提供

区本部は、自主防災組織や専門性の高いボランティア組織や要配慮者利用施設、サービス提供事業者等と連携して避難行動要支援者の避難生活を支援し、区本部での対応が困難な場合は市本部を通じて、市外部からの支援等を求める。

(5) 訓練の実施

避難行動要支援者の避難誘導や避難所生活での支援について、実効性を担保するため、自治会など自主防災組織、民生委員・児童委員、福祉サービス事業者等も参加した訓練を実施する。

第7節 災害対策要員の確保

7-1 自主防災組織との協働

自主防災組織は、迅速かつ効率的な活動ができるよう隊長1名と各班ごとにリーダー1名、サブリーダー2名以上を基本とする班を編成し、隊長は、情報班との連絡を密にして、災害の状況や各班の活動状況の把握に努め、統制の取れた活動ができるよう、各班のリーダーに適切な指示を与える。

各班は、地域防災リーダーが中心となり、市民等と共に各々の活動を行う。

なお、各班及び活動内容は概ね次のとおりとする。

- (1) 情報班（情報の収集、伝達、広報活動）
- (2) 初期消火班（出火防止、消火器・可搬式ポンプによる消火活動）
- (3) 救出・救護班（負傷者の救出・救護活動）
- (4) 避難誘導班（市民等の避難誘導）
- (5) 給食・給水班（給食・給水活動）

第8節 ボランティア

ボランティアによる防災活動が災害時において果たす役割の重要性を踏まえ、その自主性を尊重しつつ、災害対策全般において、ボランティア団体等と連携した取組みが行えるよう、ボランティアの活動環境の整備、ミスマッチ解消に向けたコーディネート、防災協定の締結等に努める。

8-1 ボランティアの活動拠点

幅広い市民層との交流を積極的に推進しながらボランティア個人や市民活動団体等が区レベル、地域レベルの拠点を、災害発生時には、広範な災害ボランティアのコーディネート機能、情報提供機能、相談機能等を有する活動拠点としても利用できるよう努める。

区レベルのボランティア活動拠点

区レベルで整備されるボランティア活動拠点を、災害発生時には、各区社会福祉協議会や地域ボランティア団体等を構成員とする「区災害ボランティア活動支援センター」として活用する。

8-2 災害時におけるボランティアの調整

(1) 区災害ボランティア活動支援センターの設置

災害発生時、区本部は被災状況及びボランティア参集等を勘案して、区災害ボランティア活動支援センターを、区民センター等に協定締結団体の協力を得て設置する。

(2) 災害ボランティア活動支援センターの役割

区災害ボランティア活動支援センターの業務

- ① 区本部との連携による災害情報の収集・提供及び連絡調整
- ② 被災者における災害ボランティアニーズの把握及び被災者への情報提供
- ③ 市災害ボランティア活動支援センターとの連携
- ④ 災害ボランティアの受け入れ
- ⑤ 災害ボランティアへのオリエンテーション
- ⑥ 災害ボランティア活動の集約・管理
- ⑦ 災害ボランティアの事故等に対する補償のための保険加入手続き

第3章 災害広報

第9節 広報体制

9-1 広報の体制

(1) 区本部は、災害発生後の災害情報のうち、同報無線等を使用して区民等の安全に係わる緊急広報（津波警報発表時、大火災発生時等の避難勧告等）を実施する。

(2) 区本部は、定期的に危機管理部に対して災害情報、生活関連情報等を報告する。

9-2 広報の内容

広報の内容は、次のとおりとし、やさしい日本語による情報提供に努める。

(1) 災害情報

- ① 気象警報、特別警報
- ② 災害の発生状況
- ③ 津波に関する情報（津波の規模、到達予想時刻等）
- ④ 応急対策の実施状況
- ⑤ 避難勧告・指示の状況
- ⑥ 区内の被害状況
- ⑦ 家庭・職場での対策と心得
- ⑧ その他必要な事項

(2) 生活関連情報

- ① 電気・ガス・水道、通信施設の被害状況と復旧見込
- ② 食料・生活必需品の供給状況
- ③ 道路交通状況
- ④ 鉄道・バス等交通機関の運行・復旧状況
- ⑤ 医療機関の活動状況
- ⑥ その他必要な情報

(3) 救援措置情報

- ① 被災証明書の発行情報
- ② 相談窓口の開設状況
- ③ 税・手数料等の減免措置の状況
- ④ 災害援護資金等の融資情報
- ⑤ その他必要な情報

9-3 緊急広報の方法

(1) 同報無線による広報

区本部は、必要に応じて同報無線により緊急広報を実施する。

(2) インターネットを利用した広域広報

区本部は広域広報の必要があると判断した情報について、区のホームページやSNS（ツイッターなど）等のインターネットを利用した緊急広報を行う。

9-4 一般広報の方法

(1) チラシ等印刷物の発行による広報

- ① 区本部は、チラシ等に掲載する広報内容を危機管理部に提出する。
- ② 危機管理部が作成したチラシ等のほか区本部で作成した広報チラシについて、区本部は、自主防災組織に対して配布の協力を依頼する。
- ③ 自主防災組織は区本部と協力して、災害時避難所への配布、個別配布、掲示板への掲示を実施する。
- ④ 区本部は、市民等に広報された内容について、区本部内職員への徹底を図る。

(2) インターネットを利用した広域広報

区本部は、市本部が広域広報の必要があると判断した情報について、此花区のホームページや、SNS(ツイッターなど)等のインターネットを利用した情報提供を行う。

(3) 広報車等の利用による現場広報

区本部は、災害の状況または道路の復旧状況に応じて必要な地域へ広報車や職員等を派遣し、広報活動を行う。

(4) 自主防災組織による個別広報

区本部は、広報活動を実施する場合、自主防災組織等に協力を依頼する。

9-5 災害記録等の作成

災害対策に資するため、災害に関する事象を写真・映像で記録する。

第10節 広報活動

10-1 自転車等を用いた広報体制の整備

携帯マイク等による直接的な広報活動にあたっては、被災地域ごとの状況に応じたきめ細かな広報により、すべての被災者に安心感を与え、適切な行動が取れるよう努める。

災害時には、地域の災害状況に応じて広報車等による広報を実施することとしているが、状況によっては、よりきめ細かな広報を行う必要が予想されることから、自転車等の多様な手段を用いた広報体制の整備を図る。また、これらの広報に必要となる携帯マイク等を最大限に確保するとともに、その効果的な配分に努める。

10-2 民間との協力協定締結の促進

断片的な情報であっても、多くの情報が集まれば画像情報と関連させることによって、被害の全体像を把握していくことができる。また、市外へも情報伝達を行うために、パソコン通信事業者等、民間と連携していく必要がある。

区民等及び民間の無線従事者からの情報提供や非常時の多ルート通信網整備に備えて、パソコン通信事業者、タクシー無線取扱業者等の把握に努めるとともに、災害時協力協定の締結を促進していく。

第4章 避難・安全確保

第11節 避難対策

災害が発生し、又は発生するおそれがある場合において、危険区域にある区民等及び事業者に対して避難のための立ち退きを勧告又は指示し、安全な場所に避難させる等人命の被害の軽減を図るためのものである。

なお、此花区は、地域特性を考慮した避難誘導體制の整備に努めるため、発災時の避難誘導に係る計画をあらかじめ作成するとともに、防災訓練の実施や防災マップの作成・配布等により、その内容を区民等に対し周知徹底するための措置を講じる。さらに、避難行動要支援者の誘導に配慮し、集団避難が行えるよう自主防災組織、自治会など地域住民組織や、民生委員・児童委員、介護保険事業者、障がい福祉サービス事業者、ボランティア等と連携した体制づくりを図る。

11-1 避難の誘導・移送

(1) 避難の開始

- ① 災害直後は自主防災組織等を主体に、組織ごとに避難場所に避難するものとする。その際、自主防災組織は、避難支援プランにより災害ごとにあらかじめ定めた体制、方法に基づき、避難行動要支援者の速やかな安否確認、救出、救護及び避難支援行動に努める。
- ② 避難に際しては、自主防災組織、隣近所等で助け合い、安全に行動できる服装とし、集団行動をとるとともに、携帯品は非常持ち出し品等必要最小限度のものにとどめる。

(2) 避難の誘導

- ① 避難勧告・指示が出された場合、大津波警報、津波警報が発表された場合又は火災等が発生し危険と判断された場合は、区本部職員、自主防災組織などが警察官等と連携し、周囲の状況を勘案し災害に応じた適切な避難場所に誘導する。
- ② 病院、学校、社会教育施設、社会福祉施設等の施設管理者は、利用者、児童等を安全に避難誘導する。
- ③ 誘導の順序は避難行動要支援者を優先する。
- ④ 誘導経路については安全を確認し、危険箇所がある場合には適宜警察官等の協力を得て、区本部職員、自主防災組織などを要所に配置する。
- ⑤ 警察官、自主防災組織等の防災対応や避難誘導等にあたる者の危険を回避するため、防災対応に係る行動ルールや退避基準を定めるとともに、それに基づく訓練及び検証を行い、必要に応じ行動ルール等の見直しを行う。

(3) 避難路の利用

大規模な避難を円滑に行うため、原則として、あらかじめ定められた避難路を利用する。

(4) 移送

区本部職員等が自力で避難できない避難者を確認した場合は、防災関係機関の協力を得て車両、船艇、ヘリコプター等で移送する。また、被災者が多数で広域な範囲にわたる大規模な移送が必要な場合は、自衛隊、海上保安監部、府警察等の協力を得て、迅速に他の地域へ移送するものとする。

11-2 津波からの避難対策

(1) 津波避難計画等の策定

此花区は、津波浸水が予想される地域において、津波から「逃げる」とともに、津波被害による要救

助者を保護するための対策を取りまとめた津波避難計画等を作成する。

(2) 津波により浸水すると予測される地域及びその周辺に事業所を設置している事業者は、警報等の情報に基づいて避難が行われるよう、従業員等への教育を行うとともに、此花区が指定する避難場所のほか、従業員等が避難することができる場所の確保を図るとともに、避難者の受入れに努める。

(3) 津波からの円滑な避難の確保に関する事項

避難対策等

① 避難の基本方針

津波からの迅速かつ確実な避難を実現するため、徒歩による避難を原則として、地区の実情を踏まえつつ、できるだけ短時間で避難が可能となるよう避難対策をすすめる。

【大阪府域に大津波警報、津波警報が発表された場合】

ア 避難指示区域内に住む人は、浸水想定区域外の広域避難場所、一時避難場所等のオープンスペースへ避難する。

イ 浸水想定区域外への避難が困難な場合（高齢者や要介護者など移動が困難な場合）や時間的に余裕が無い場合は、付近の丈夫な建物（津波避難ビル等）の浸水しない階か、災害時避難所の浸水しない階に避難する。

ウ 避難指示区域外にいる人は、引き続き避難情報の発表に注意する。

② 津波による避難指示の対象となる地区

【大阪府域に大津波警報または津波警報が発表された場合】

なお、いずれの場合も災害の状況により、避難勧告区域を適宜拡大する。

対象区	気象庁発表 津波注意報	大津波警報 津波警報
此花区	注意喚起 避難指示（緊急）等の発令なし ※1	避難指示（緊急）

※1 漁業従事者、沿岸港湾施設等で仕事に従事する者等を念頭に、海岸堤防等より海側の地域においては、港湾管理者、河川管理者等と連携し、必要に応じて注意喚起等を行う。

11-3 地震に伴う堤防沈下等にかかる避難計画

地震に伴う堤防沈下等により地震直後から潮位により浸水が始まる地域の避難対策地震に伴う堤防沈下等による浸水から区民等の生命又は身体に対する危険を回避するため、該当地域における避難計画を定める。

(1) 避難計画

避難の開始

地震に伴う堤防沈下等による浸水は、地震発生後に時間的猶予なく発生することから、避難の勧告・指示によることなく、即時浸水地域内の区民等は、地震発生後速やかに避難（以下、即時避難）を開始する。

(2) 避難の基本方針

具体的な即時避難の方法については、各即時浸水地域の状況に応じてあらかじめ定めた避難計画に基づき実施することとし、その基本方針は次のとおりとする。

① 地震発生後、速やかに自宅又はその付近の即時避難可能な建物の、浸水しない階に即時避難を行う。

- ② 地震に伴う堤防沈下は、海溝型、直下型のいずれの地震においても発生の可能性があることから、地震の種別にかかわらず即時避難を行う。
- ③ 一定時間、浸水状況の確認を行い、津波の情報などを基に必要な場合は、津波避難ビルなど近隣の堅固な建物へ避難する。
- ④ 即時浸水地域内の市民及び事業者は相互に協力し、即時避難可能な建物の確保を行う。

(3) 避難計画の策定

- ① 即時浸水地域を含む地域の自主防災組織は、即時浸水の水位、浸水到達時間等の情報を基に、避難計画を作成する。
- ② 各即時浸水地域の避難計画は、各地域で作成する「地区防災計画」に規定する。

(4) 即時浸水地域の区民等への周知

- ① 広報資料等を作成し、地震に伴う堤防沈下等による浸水の危険性や避難計画等の周知を行う。
- ② 即時浸水地域を含む地域の自主防災組織は、津波避難訓練等を実施し、即時避難の方法等の周知に努める。

(5) 津波情報の伝達

即時避難後の行動には、津波情報などが不可欠であることから、津波からの避難の勧告、指示の伝達方法に加え、即時浸水地域への情報伝達を充実するための方法について検討を行う。

第12節 避難施設

災害から区民等を安全に避難させるため、避難場所、避難所、避難路の整備・拡充を図り、あらかじめ指定するとともに日頃から区民等への周知徹底を図るものとする。

また、災害直後には、それぞれの施設を中心としたコミュニティ単位で自立した対応がなされるよう、それぞれの施設に対して防災機能の充実を図っていく。

なお、既存の避難場所・避難路等について、最大クラスの津波（レベル2）に対しても対応が可能かどうか危機管理室と協力して再点検、安全確認を行った上で、次の取組みをすすめる。

12-1 避難場所

避難場所とは、地震火災や津波等の災害から身を守るために緊急に避難する場所であり、広域避難場所、一時避難場所、津波避難施設として整備を図る。

(1) 広域避難場所

大規模火災が発生し、延焼拡大した場合から生命の安全を確保するため、火災に対して安全な空間として広域避難場所を確保する。

① 広域避難場所の要件

ア 原則として10ha以上の規模を有し、または、土地利用の状況、その他の事情を勘案して災害時における避難に必要な規模を有し、周辺の火災及び浸水から安全な形態とするとともに、消防水利、災害用資材及び生活必需品の備蓄等防災上必要な措置を実施し、災害応急対策活動の拠点としての機能を確保する。

イ 受入可能人口は、周辺の火災から安全な面積に対して、原則として1人あたり2㎡とし、現状でその確保が困難な地区は、1人あたり1㎡以上として計画する。

ウ 概ね周辺2～4km以内の地域を避難圏域とし、圏域内における避難対象地域（不燃領域率70%未

満及びそれに囲まれた地域)の人口が受入可能人口を超えないものとする。また、一時的に広域避難場所を生活の場とする可能性もあるため、その避難生活に対応するための機能の充実も推進する。

此花区の広域避難場所

名称	所在地	全面積	収容人員
高見地区 (高見フローラル タウン一帯)	高見1丁目・伝法1丁目	38.3ha	293,000人

(2) 一時避難場所

避難を円滑に実施するため、コミュニティ単位における安全な空間としての一時避難場所を確保するものとする。

一時避難場所の要件

広場、公園、空地等で、原則として1㎡につき1人を基準として200人以上避難可能な場所とする。ただし、地域の実状に応じて、避難可能人数が200人未満の施設も可能とする。

○ 此花区内の一次避難所については別表1のとおり

(3) 津波避難施設（津波避難ビル、水害時避難ビル）

区民等が津波などの水害から一時的または緊急に避難・退避する施設として、堅固な高層建物等の人工構造物を確保するものとする。

津波避難施設は、大阪府による津波浸水想定結果（H25.8）を踏まえ、避難に重点を置いた対策のひとつとして、区民等が津波から緊急かつ一時的に避難・退避するためとして確保を進める。

① 津波避難施設（津波避難ビル、水害時避難ビル）の要件

ア 建物の構造

原則として鉄筋コンクリート造または鉄骨鉄筋コンクリート造による構造の建物とする。ただし、安全性が確認された場合は、鉄骨造についても指定する。

イ 耐震性

新耐震設計基準（建築基準法施行令昭和56年改正）に適合していることを基本とする。

ウ 避難場所・時間

- ・ 原則として3階相当以上とする。
- ・ 津波警報等が解除されるまで、避難者が長時間滞在しなければならないことも考えられることから、避難者1人当たり概ね1.6㎡を確保することを基本とする。ただし、避難者1人当たり面積については、地域の実状に応じた設定が可能とする。
- ・ 少しでも多くの施設を確保するため、施設の実態に応じ、避難者の受け入れ時間の限定（営業時間中のみ等）も許容する。

○ 此花区内の津波避難施設については別表2のとおり。

② 津波避難施設（津波避難ビル、水害時避難ビル）の確保手順

ア 市及び外郭団体の施設

危機管理室と所管する局が調整の上、確保を進める。

イ 津波避難拠点施設

観光客等にもわかりやすい避難施設として、拠点施設を確保するよう努める。

ウ 民間施設

地域の民間施設については、区役所が地域住民と協働し、施設管理者と協定を締結する等、確保を進める。

エ 複数の区にまたがる施設

チェーンストア等、複数の区にまたがる施設等市域において一括して協定を締結できるものについては、危機管理室にて対応する。

オ 鉄道施設、道路施設等の活用

関西広域連合にて包括的に検討を進めている鉄道施設や道路施設等の高架部について、地域の実情に応じて避難施設として確保するよう、関係機関と協議を進める。

カ 新設建築物

対象区において新規開発を予定している建築主に対して協力を呼び掛ける。

③ 津波避難施設（津波避難ビル等）の周知

日頃から市民等に当該施設が津波避難ビル等であることを、図記号を利用した看板又はステッカー等により周知する。

1 2 - 2 避難所

避難所とは、災害により住宅に留まる事が出来ない区民等が、一時的に避難生活を行う場所であり、災害時避難所、福祉避難所として整備を図る。

整備にあたっては、避難者の発生規模と避難所等による受入れ人数等について、あらかじめ評価するとともに、それらが不足した場合、大阪市・府と連携し、公的施設や民間施設の避難所としての利用拡大、自宅での生活が可能な者に対する在宅避難への誘導等を行い、受入れの確保を図る。

なお、学校を避難所として指定する場合には、学校が教育活動の場であることに配慮するとともに、避難所としての機能は応急的なものであることを認識の上、避難所となる施設の利用方法等について、事前に地域住民等の関係者と調整を図る。

(1) 災害時避難所

災害により住居等を滅失したため、継続して救助を要する区民等に対し、宿泊、給食等の生活機能を提供する場である災害時避難所を指定する。

災害時避難所として指定している施設については、大阪市と協力し、耐震性の確保及び防災機能の充実を図る。災害時避難所の要件は、下記のとおりとし、指定にあたっては、区本部長は関係機関と密接な連携を図り、あらかじめ所有者、管理者、占有者又は関係者の承諾を得るとともに区民への周知徹底を図る。

① 災害時避難所の要件

ア 地域の人口、誘致圏域、地形、災害に対する安全性等に配慮した施設で、原則として2㎡につき1人を基準として50人以上受入できる建物とする。ただし、地域の実状に応じて、受入可能人数が50人未満の施設も可能とする。

イ 学校を災害時避難所とする場合は、下記の有効率から有効面積を算出し、有効面積1.6㎡につき1人として受入可能人数を算出するものとする。

・普通教室 有効率70%

- ・廊下 有効率50%
 - ・屋内運動場 有効率80%
- ウ 指定にあたっては公共施設のほか、民間施設の活用も検討する。
- 此花区内の災害時避難所については別表1のとおり。

② 地域における民間施設の災害時避難所への支援及び協力

地域住民が主体となって民間施設を確保するなど、地域特性を考慮した新たな災害時避難所指定についての支援を行う。

また、施設提供の依頼を受けた施設の所有者、管理者、占有者又は関係者は、施設の提供に協力するよう努める。

(2) 福祉避難所

要配慮者が利用しやすいよう、避難所施設のバリアフリー化に努めるなど、次の方針に基づき大阪市と協力し施設の福祉的整備を図るとともに、要配慮者を保護するための福祉避難所の指定を図る。また、福祉関係者等の協力も得ながら、受入れを行った要配慮者を適切に介護・支援できるよう、大阪市・府と連携し必要な人員を確保する。

① 福祉避難所の整備方針

- ア 多人数の避難に供する施設の管理者は、高齢者、障がい者等の移動等の円滑化の促進に関する法律（バリアフリー法等）に基づいた整備・改善に努める。
- イ 多人数の避難に供する施設（棟）の管理者は、その施設内に多機能トイレを設置するよう努める（ただし、障がい者等が他の施設（棟）の多機能トイレを支障なく利用できる場合は、この限りではない。）。
- ウ 施設管理者の協力を得て、避難所生活において支障なく移動できるルート（仮設スロープの準備等）を確保するなど、避難生活（水・食料・物資の受け取り、仮設トイレの使用等）に支障のないよう配慮する。
- エ 施設管理者の協力を得て、本市とともに、日常生活用具等、備品の整備に努める（施設ごとの備品の整備が困難な場合は、緊急時に支障なく使用に供することができるよう、管理体制を整える。）。
- オ また、災害時避難所の一部の部屋を、各地域で行われる避難所開設訓練等を通じ、福祉避難室として確保する。
- カ 福祉避難所としての利用が求められる社会福祉施設等について、施設管理者と調整の上、区単位で福祉避難所の指定を行うとともに、公的施設や民間の旅館・ホテルに協力依頼を行う。
- キ 指定した社会福祉施設に対して、地域の自主防災組織への積極的な参画を促す。

1 2 - 3 避難場所・避難所の管理

(1) 避難所の管理及び避難者の受入

① 広域避難場所の管理

- ア 広域避難場所の管理者は原則として区本部長とする。
- イ 広域避難場所の管理者は各広域避難場所について連絡所を設置する場所をあらかじめ定めておく。
- ウ 区本部長は、広域避難場所を開設した場合に、その管理にあたらせるため、広域避難場所ごとに、あらかじめ職員の中から広域避難場所の主任及び担当係員を指名しておく。
- エ 市本部、区本部から避難の勧告・指示が出され、広域避難場所に区民等を避難させる時には、あ

あらかじめ区本部長は携帯無線機などを携行した広域避難場所の主任及び係員を直ちに広域避難場所に赴かせ、区本部及び市本部との連絡にあたらせるなど広域避難場所の開設に必要な措置をとる。
オ 上記に定める他は、下記を準用する。

② 災害時避難所及び一時避難場所の管理

「避難者受入業務実施細目」によるものとするが次の事項に留意する。

- ア 避難者に関する情報を早期に把握し、食事のみ受け取りに来ている避難者に係る情報の把握に努め、区本部は市本部へ報告を行う。
- イ 混乱防止のための避難者心得の掲示
- ウ 応急対策の実施状況・予定等の情報の掲示
- エ 生活環境への配慮を行い、常に良好なものとするため、食事提供の状況、トイレの設置状況の把握、避難者への情報提供及び防犯対策に努める。
- オ 要配慮者への配慮
- カ 避難の長期化等必要に応じて、プライバシーの確保状況、入浴施設設置の有無及び利用頻度、洗濯等の頻度、医師や看護師等による巡回の頻度、暑さ・寒さ対策の必要性、ごみ処理の状況など避難者のメンタル面を含めた健康状態や避難所の栄養状態の把握に努め、必要な措置を講じる。
- キ 外国人に対して、言語、生活習慣、文化等の違いに配慮した運営に努める。
- ク 相談窓口の設置
- ケ 動物飼養者の周辺への配慮の徹底
- コ 大規模災害が発生した場合、避難生活が長期間に及ぶ可能性があることから、避難者の精神的な安心と、一刻も早い通常の生活の回復につなげるため、長期間の対応が可能な体制整備を図る。
- サ 避難所の運営における男女共同参画を推進するとともに、高齢者、障がい者、男女のニーズの違い等多様な視点に配慮するものとする。また、女性専用の物干し場、更衣室、授乳室の設置や生理用品、女性用下着の女性による配布、巡回警備や防犯ブザーの配付等による避難所における安全性の確保など、女性や子育て家庭のニーズに配慮した避難所の運営に努める。
- シ 区本部長は、避難所のライフラインの回復に時間を要すると見込まれる場合や、道路の途絶による孤立が続くと考えられる場合は、当該地域に避難所を設置・維持していくことの適否を検討する。

「避難者受入業務実施細目」

第1 通則

- 1 区本部長は、この細目の定めるところに従い、区内避難所の開設及び管理に任ずる。
- 2 区本部長は、区内に設置した避難所の管理にあたらせるため、職員の中から避難所主任及び係員を任命配置する。

第2 避難所の開設

- 1 区本部長は、区内に開設すべき避難所につき、あらかじめその受入人員、炊き出し等の諸施設を調査し、これを危機管理部長に報告する。
- 2 災害が発生したときは、区本部長は直ちに必要と認めた避難所に要員を派遣し、避難者の救護を開始する。
- 3 危機管理部長は、状況に応じ区本部長に指示して必要と認めた箇所の避難所又は隣接区の避難所を開設させることができる。
- 4 区本部長は、自主防災組織等を通じ、または掲示ビラ等をもってあらかじめ避難所の所在地及び被災の際の注意事項を区民等に周知させる。

第3 避難者の受入

1 災害が発生した時は、区本部長は災害の種類、気象関係等を特に考慮し、適切な避難所を選定のうえ避難者を災害時避難所に受入れる。

区本部長は、災害発生と同時に進行避難に備えるため、あらかじめ振興町会ごとに適当な一時避難場所を定めておき、学校長、自主防災組織等の責任者に臨機の処置をとらせるとともに、警察官等の協力を得て避難を行い、災害時避難所に受入する。

2 区本部長は、他区等より避難してきた避難者についても受入に努める。

3 区本部長は、避難者の受入に当たり区内の災害時避難所が被害を受けて受入困難となったとき、又は受入能力に余力がないときは、危機管理部長の指示を受け、他区の災害時避難所に避難者を誘導する。

4 区本部長は、被災者の受入を開始したときは、直ちにその旨を危機管理部長に報告する。

5 避難所主任は、避難者を受入したときは、速やかに避難者名簿を作成する。なお、名簿作成にあたっては、統一の様式を準備し、名前・住所・被災状況・家族状況・健康状態等を含めて、原則として避難者自身が記載し、避難所主任に提出する。また、避難者が避難所を退出又は転出するときは、避難所主任に届け出ること

6 避難所主任は、支援を要する者の把握を行う。

7 避難所主任は、応急救助を必要と認め難い者については避難所を退所させる。

第4 避難所の運営管理

1 避難所主任は、学校長、警察官、自主防災組織等の協力を得て避難所の管理に任ずる。

2 避難所主任は、教職員、自主防災組織等の協力を得て避難所の運営にあたる。

3 避難所主任は、所定の避難者心得を各避難所に掲示し、避難者をしてこれを遵守させる。

4 避難所受入中の傷病者については、これを保健福祉班に引き継ぐ等適切な処置を講ずる。

5 避難所主任は、避難所に修理の必要が生じたときは、区本部長を通じ危機管理部長に修理を要求する。

6 避難所主任は、食料その他必要物資の所要量を区本部長に上申し、所定の手続を経て速やかにこれを調達する。

7 避難所主任は、避難所において食料の炊き出し、寝具その他必要物資の配給を行う。

8 避難所の防護、警備、炊き出し、配給等に関しては、警察官、自主防災組織等のほか受入者等に適宜協力を求めることができる。

9 避難所主任は、日報により受入状況を区本部長に報告する。区本部長はその報告にもとづき受入状況を危機管理部長に報告する。

10 避難所主任は、次の各号の一に該当する事項が発生したときは、直ちにその旨区本部長に報告する。

(1) 避難者の受入を開始したとき

(2) 受入者全員が退所又は転出したとき

(3) 受入者が死亡したとき

(4) 避難所内に悪疫が発生したとき

(5) 避難所の建物が倒壊、浸水、類焼等の危険を生じたとき

(6) 避難所において騒じょうが生じ又は生じるおそれがあるとき

(7) その他報告を必要とする事項が生じたとき

11 区本部長は、前項の場合その他報告の必要があると認める事項が生じたときは、直ちに臨機の処置を行うとともに、これを危機管理部長に報告する。

12 前各項のほか、避難所において行う業務並びに自主防災組織等との協議関係等に関し必要な指示事項は、別にこれを定める。

第5 避難状況の調査・報告

- 1 避難所主任は、直ちに避難者数、避難者の健康状態、その他必要に応じて区本部長に報告する。
- 2 区本部長は報告を受けた避難状況を取りまとめ、危機管理部長に速やかに報告する。
- 3 事前に計画されていない施設に避難者が集結した場合は、避難者から届出を受けるなど、把握に努める。

第6 避難所への情報提供の方法

区本部長は、避難者の要望等を把握するため、必要に応じて臨時相談所を設置する。

第7 受入者の事後処置

区本部長は、区内避難所における避難者には次の各号によりこれを処置する。

- (1) 自宅又は縁故先に復帰し得るものは、速やかに復帰させる。
- (2) 7日以上を経過し復帰することのできない者については、危機管理部長の指示を受け受入期間の延長もしくはその指示する施設へ誘導する。

なお、この場合、教育施設に関しては学校教育の再開に支障のないよう努めるものとする。

③ 自主防災組織の取組み

災害時に地域住民や自主防災組織等による円滑な避難所運営ができるよう、あらかじめ地域の実情に応じた「避難所運営マニュアル」を作成し、避難所における職員、地域防災リーダー、ボランティアなどの役割分担や連携方法、避難所間の連絡方法等を明確にするとともに、ライフラインの途絶により自宅での生活が困難な在宅の市民の支援についても明確にしておく。

また、「避難所運営マニュアル」の有効性を検証するためにも区民とともに避難所運営に関する訓練を行うとともに、それを踏まえた「避難所運営マニュアル」見直しを適宜行う。

(2) その他の災害時避難所の設置

大規模な災害が発生し、指定した避難所の被害が甚大であるか又は避難者が多数のため受入能力を超えた場合、区本部長は臨時の災害時避難所を設営し避難者を受入する。なお、区本部長は危機管理部長と連携をとり、想定しうる施設の所有者、管理者、占有者又は関係者に事前に承諾を得るものとする。

(3) 区内で避難者の受入が困難な場合の対応

区域の広範囲において津波浸水被害が発生するなど、区内で利用可能な災害時避難所を開設してもなお、避難者を受入できない場合、区本部長から危機管理部長へ要請を行う。

別表 1

災害時避難所・一次避難所一覧表

平成 29 年 2 月現在

避難所名	一時避難 可能人員 (人)	災害時避難 可能人員 (人)	一 回 炊出能力 (食)	所在地
西九条小学校	4,500	909	400	西九条 4-3-41
四貫島小学校	2,500	809	300	四貫島 2-16-29
梅香小学校	3,100	879	500	梅香 3-17-29
春日出小学校	4,200	982	300	春日出中 1-13-23
伝法小学校	3,400	1,475	300	伝法 3-13-10
高見小学校	5,400	1,349	300	高見 1-3-35
西島小学校	4,700	1,012	300	西島 2-5-12
島屋小学校	4,500	1,154	400	島屋 2-9-36
春日出中学校	4,700	1,193	—	春日出南 1-2-8
梅香中学校	5,700	1,286	—	春日出北 3-11-33
此花中学校	6,200	1,358	—	高見 2-14-31
咲くやこの花中学校・高等学校	8,484	618	—	西九条 6 - 1 - 44
もと此花総合高等学校	8,500	465	—	西島 2-3-16
昇陽中学校・高等学校	4,400	2,315	—	朝日 1-1-9
(株)セントラル・コート・ストレージ	120	63	—	桜島 3-2-17
此花区民ホール3階	287	—	—	四貫島 1-1-8
此花区在宅サービスセンター	160	—	—	伝法 3-2-27
西九条福祉会館2階	48	—	—	西九条 2-3-15
西九条公民館	74	—	—	西九条 1-3-16
桜島憩の家3階	100	—	—	桜島 3-4-102
郵便事業(株)新大阪支店	260	—	—	島屋 4-1-18
住友化学工業(株)	10,000	—	—	春日出中 3-1-98
住友金属工業(株)	10,978	—	—	島屋 5-1-109
住友電気工業(株)	1,200	—	—	島屋 1-1-3
西九条上公園	3,000	—	—	西九条 1-30
西九条南公園	1,200	—	—	西九条 2-1
西九条小公園	300	—	—	西九条 3-8
西九条西公園	3,500	—	—	西九条 4-4
西九条公園	2,400	—	—	西九条 5-4

朝日橋公園	12,200	—	—	西九条 6-1
千鳥橋公園	1,400	—	—	四貫島 1-1
四貫島西公園	1,900	—	—	四貫島 2丁目高架下
嬉ヶ崎公園	400	—	—	嬉ヶ崎橋高架下 (朝日2丁目付近)
梅香東公園	3,800	—	—	梅香 1-3
梅香公園	4,100	—	—	梅香 3-3
此花公園	5,200	—	—	春日出北 1-5
春日出北公園	600	—	—	春日出北 2-16
春日出中公園	300	—	—	春日出中 1-26
春日出公園	17,800	—	—	春日出南 1-2
春日出南公園	1,200	—	—	春日出南 2-9
千鳥橋みどり公園	1,300	—	—	伝法 1-2
伝法コミュニティひろば	6,200	—	—	伝法 2-1
伝法東公園	1,900	—	—	伝法 2-11
伝法中公園	800	—	—	伝法 3丁目高架下
伝法北公園	600	—	—	伝法 3-7
伝法公園	11,500	—	—	伝法 3-14
伝法南公園	1,000	—	—	伝法 4丁目高架下
伝法西公園	3,500	—	—	伝法 5-3
イカリソース跡地ひろば	4,100	—	—	伝法 5-6
高見公園	2,000	—	—	高見 1-5
高見北公園	1,000	—	—	高見 1-7
高見西公園	600	—	—	高見 3-14
西島東公園	2,000	—	—	西島 1-7
西島中公園	400	—	—	西島 3-13
西島南公園	1,000	—	—	西島 3-19
西島公園	3,500	—	—	西島 6-1
島屋公園	400	—	—	島屋 3-3
島屋西公園	2,779	—	—	島屋 5-1
島屋南公園	3,357	—	—	島屋 6-2
桜島公園	3,400	—	—	桜島 3-5
合計	204,1471	15,867	2,800	
災害時避難所	15カ所	一次避難所	60カ所	

別表2

◆ 此花区内 津波避難ビル等 確保状況 (H29.2 現在)

54, 141 人

◇ 公共施設

27, 866人

番号	施設名	種別	所在地	避難可能人数	時間指定
1	西九条小学校	市立学校	西九条4-3-41	885	—
2	四貫島小学校		四貫島2-16-29	982	—
3	梅香小学校		梅香3-17-29	591	—
4	春日出小学校		春日出中1-13-23	632	—
5	伝法小学校		伝法3-13-10	1,628	—
6	高見小学校		高見1-3-35	1,385	—
7	西島小学校		西島2-5-12	953	—
8	島屋小学校		島屋2-9-36	1,273	—
9	春日出中学校		春日出南1-2-8	1,091	—
10	梅香中学校		春日出北3-12-24	1,777	—
11	此花中学校		高見2-14-31	748	—
12	咲くやこの花中学校・高等学校		西九条6-1-44	1,093	—
13	もと此花総合高等学校(新館)		西島2-3-16	831	—
14	高見住宅 24号館	市営住宅	高見1-6	374	—
15	高見住宅 25号館			635	—
16	高見住宅 26号館			228	—
17	高見住宅 41号館			263	—
18	高見住宅 44号館			565	—
19	高見住宅 51号館			254	—
20	高見住宅 52号館			284	—
21	高見住宅 57号館			968	—
22	春日出 1号館		春日出北2-5	114	—
23	春日出 2号館			76	—
24	西島東 1号館		西島1-3	1,024	—
25	西島東 2号館			313	—
26	秀野西住宅3号館		西島1-11	390	—
27	秀野西住宅4号館		西島1-16	523	—
28	秀野西住宅5号館		西島1-17	386	—
29	西島第2住宅		西島3-12	415	—
30	西島 21号館		西島4-1	1,548	—
31	コーシャハイツ西島		西島4-1-1	1,235	—
32	西島 22号館		西島4-2	1,121	—
33	島屋 1号館		島屋2-8	161	—
34	桜島 1号館	桜島3-6-30	321	—	

35	春日出住宅	府営住宅	西島3-14-24	453	—
36	此花会館/梅香殿	市民利用施設	西九条5-4-24	489	—
37	クレオ大阪西及び子ども文化センター		西九条6-1-20	107	—
38	大阪市下水道科学館		高見1-2-53	88	—
39	桜島北公園	公園	桜島1	1,662	—
小 計				27,866	

◇ 民間施設

26,275人

番号	施設名	管理者	所在地	避難可能人数	時間指定等
40	(株)中日本冷蔵本社センター	(株)中日本冷蔵	西九条1-1-20	40	平日8:30~17:00 (日曜・祝日は除く)
41	阪神電鉄西九条駅駐輪場	阪神電気鉄道(株)	西九条1-22	258	—
42	(株)日立物流 第一ビル	(株)日立物流	西九条1-28-13	100	—
43	(株)日立物流 安治川物流センター	(株)日立物流	西九条1-37-32	100	—
44	ルモン西九条	ルモン西九条 管理組合	西九条2-1-32	530	—
45	ケアハウス大阪安立	(社福)昭徳会	西九条3-4-61	72	—
46	ファミリー西九条	ファミリー西九条 管理組合	西九条3-4-34	606	—
47	ライフ西九条店	(株)ライフ コーポレーション	西九条6-1-132	500	営業時間中
48	ハイマート千鳥橋	ハイマート千鳥橋 資産管理組合	四貫島1-7-6	95	—
49	昇陽中学校・高等学校	学校法人 淀之水学院	朝日1-1-9	1,253	—
50	フローラルタウン千鳥橋	独立行政法人 都市再生機構	伝法1-3	517	—
51	此花区在宅サービスセンター	(社福)大阪市 此花区 社会福祉協議会	伝法3-2-27	90	営業時間中

52	日新製鋼(株) 伝法寮	日新製鋼(株)	伝法5-1-18	309	8:30~22:00 (土・日・祝祭 日含む)
53	キングマンション此花Ⅱ	キングマンション 此花Ⅱ管理組合	伝法5-1-24	335	平日(月~金 9:00~17:00)
54	淀川リバーサイドヴィラ	淀川リバーサイド ヴィラ管理組合	伝法5-4-12	224	—
55	(株)鴻池組 恩貴島鴻和寮	(株) 鴻池組	伝法6-1-49	330	—
56	阪神住建グランドヴィラ此花Ⅰ	阪神住建 グランドヴィラ 此花Ⅰ管理組合	伝法6-2-1	288	—
57	高見フローラルタウン四番街 54号棟	独立行政法人 都市再生機構	高見1-4	540	—
58	高見フローラルタウン四番街 55号棟			280	—
59	高見フローラルタウン四番街 56号棟			558	—
60	高見フローラルタウン五番街 45号棟		高見1-5	583	—
61	高見フローラルタウン五番街 46号棟			406	—
62	イオン高見店		イオンリテール(株)	高見1-5	3,794
63	高見フローラルタウン六番街 21号棟	独立行政法人 都市再生機構	高見1-6	216	—
64	高見フローラルタウン六番街 22号棟			886	—
65	高見フローラルタウン六番街 23号棟			119	—
66	高見フローラルタウン七番街 13号棟		高見1-7	170	—
67	高見フローラルタウン七番街 14号棟			628	—
68	高見フローラルタウン七番街 15号棟			742	—
69	高見フローラルタウン七番街 16号棟			1,194	—
70	パークシティふれあいのまち 17号棟		高見1-8	239	—
71	パークシティふれあいのまち 18号棟			323	—
72	ドルミ新淀川 15号館		ドルミ新淀川 管理組合	西島1-2-15	144
73	シティハイツ此花	シティハイツ此花	西島1-2-15	1,094	—
74	レピア此花	レピア此花 管理組合	西島3-16-17	242	—

75	住友電気工業(株)大阪製作所 浩気寮	住友電気工業(株) 大阪製作所	西島3-23-5	144	—
76	西島リバーサイドビルなぎさ街 15号棟	独立行政法人 都市再生機構	西島4-1	275	—
77	西島リバーサイドビルなぎさ街 16号棟			376	—
78	西島リバーサイドビルなぎさ街 18号棟			191	—
79	西島リバーサイドビルなぎさ街 19号棟			230	—
80	西島リバーサイドビルなぎさ街 20号棟			2,247	—
81	ルネパークプラザ	ルネパークプラザ 管理組合	西島6-3-4	667	—
82	住友電気工業(株) 大阪製作所大阪事務所	住友電気工業(株) 大阪製作所	島屋1-1-3	220	—
83	サーパス此花ネオスタイル	サーパス此花ネオス タイル管理組合	島屋3-8-16	445	—
84	シンプルハートホテル大阪	ハヤタ工業(株)	島屋3-10-31	70	島屋3丁目 10番街区の 住民対象
85	ガーデン天使	(社福) イエス団	島屋4-1-11	134	—
86	リバーガーデン ECO シティ アリスの森	リバーガーデン ECOシティ 管理組合	島屋6-2-110	1,722	—
87	(株)アド・ダイセン 関西メールセンター	(株) アド・ダイセン	北港1-1-1	811	平日(月~金) 9:00~17:30)
88	大阪港舞洲食品流通センター	大阪港埠頭 ターミナル(株)	北港白津 1-11-52	938	営業時間中
	小 計			26,275	

第13節 帰宅困難者対策

大阪市には、事業所や学校、集客施設等が集中し、約111万人（平成22年度国勢調査）にのぼる昼間流入人口を擁しており、加えて買い物客等が流入、滞在しているが、大災害により交通機能等が停止した場合、速やかに帰宅できない帰宅困難者が多数発生することが予想される。

大阪府域において、大規模災害が発生し、一斉帰宅が開始された場合には、混雑による集団転倒や沿道建物からの落下物等により、死傷者が発生するおそれがある。また、道路上へ人があふれることにより、交通事故の発生、人命救助や緊急輸送等の応急対策活動ができなくなるおそれがある。

実際、東日本大震災では、首都圏において、多くの帰宅困難者がターミナルに集中し、大きな混乱が発生するとともに、歩道では徒歩帰宅者による混雑が発生し、また、車道ではタクシーやマイカーによる帰宅者で渋滞し、緊急車両の通行が困難な状況であった。このことから、一斉帰宅の抑制とターミナルにおける混乱防止が、帰宅困難者対策のなかでもたいへん重要であり、行政機関のみならず市民等や事業者が主体的に帰宅困難者対策に重点的に取り組む。

13-1 帰宅困難者対策の方針

区民等の安全を確保するため、災害等により交通機能等が停止した際のターミナルへの人の集中による混乱や、帰宅困難者が一斉に徒歩帰宅を開始した場合における混雑による集団転倒や火災、沿道建物からの落下物等による死傷者の発生を防止を図る。また、道路上へ人があふれることによる事故の防止や応急対策活動の阻害の防止を図る。

可能な範囲で地域における「共助」の活動を事業者等に働きかける

13-2 ターミナル周辺の滞留者対策

東日本大震災の際、首都圏において、帰宅困難者（滞留者）を支援した施設については、災害救助法が適用された主旨から、ターミナル周辺の企業・事業所等の施設管理者に対し、滞留スペースの提供や滞留者への支援について協力を求め、行政・企業等が帰宅困難者を支援できる環境づくりに努める。

13-3 交通情報の入手・伝達方法の確立

大阪市や府・関西広域連合と連携して、被害状況や道路・鉄道の交通状況等の情報の入手・伝達方法を確立し、区民等や事業所に対し普及啓発を図る。また、区民等に対し、家族の安否確認の方法について普及啓発を図る。

13-4 帰宅困難者数の推計

市内滞留者のうち、遠くなるにつれ徒歩帰宅が困難になるという考え方により、次のとおり帰宅困難者数を推計する。

(1) 帰宅可能率の設定

帰宅困難者の帰宅可能率は、次のとおり設定している。

- ① 自宅までの帰宅距離が10km以内の人は、全員が徒歩帰宅が可能
- ② 自宅までの帰宅距離が10km～20kmの人は、帰宅距離が1km増えるごとに10%ずつ帰宅可能者を逡減
- ③ 自宅までの帰宅距離が20km以上の人は、徒歩帰宅は全員が困難

(2) 帰宅困難者数の推計

此花区の帰宅困難者数 1.20万人

第14節 避難行動要支援者に関する対策

14-1 避難行動要支援者避難支援対策

大規模な災害が発生した場合、消防や警察等による支援体制（公助）が整うまでには一定の時間を要するうえ人的体制を含めて対応能力等に限界がある。そのため、自らの命は自らで守り、支援が必要な者に対しては、地域で助け合う地域防災活動が重要である。

効果的な避難行動要支援者の避難支援対策を行うためには、避難行動要支援者自身や家族による自助、及び隣人や友人など地域で備え助け合う共助を基本とし、それらに加えて公的機関による公助の三位一体の活動が必要であることから、自助、共助、公助の各役割分担を明確にするとともに、本市は、地域における自主防災組織による避難行動要支援者の避難支援の取組みが効果的に進展するよう自主防災活動の支援を行う。

大阪市においては、避難行動要支援者の自助、地域（近隣）の共助を基本とし、避難行動要支援者自身（自助）、自主防災組織（共助）、本市（公助）それぞれの果たすべき事項を取りまとめた「大阪市災害時要援護者避難支援計画(全体計画)」を平成21年11月に策定し、避難行動要支援者の避難支援等の取組みを進めている。

また、避難行動要支援者対策については、平成26年度に自助・共助・公助の役割分担の整理、自主防災活動への支援強化による地域防災力の向上を通じて、地域における避難支援行動要支援者の取組みを促進するため、「大阪市災害時要援護者避難支援計画（全体計画）」を改訂するとともに、名称を「大阪市避難行動要支援者避難支援計画（全体計画）」に変更し、効果的な取組みの推進を図る。

（1）避難行動要支援者の取組み（自助）

① 自己の安全確保

平常時から災害に関する危機意識を持って、家具の固定等自らの住まいの安全確保や医薬品、医療器具、生活用品等の準備など、自己の安全を確保するよう努める。

② 避難行動の確保

災害発生時に自身及び家族で適切な避難行動が行えるよう努めるとともに、平常時から隣近所等、身近な人たちとのコミュニケーションを大事にし、防災訓練や地域の活動などに積極的に参加するよう努める。

（2）自主防災組織の取組み（共助）

① 自主防災活動の企画、立案

人口分布や災害想定など地域の特性を踏まえ優先的に取り組むべき活動など、自主防災活動として取り組む内容を、区民等の参加による話し合いなどを通して決定する。特に、避難行動要支援者情報の収集・管理方法や、避難行動要支援者への個別支援内容、そして支援者の選出方法などに関するルールを「避難行動要支援者支援計画」として作成することが重要である。

② 避難行動要支援者情報の把握、避難支援プラン（個別計画）の作成

自分たちの地域で生活する人はみんなで守っていくということを基本に、平常時から避難行動要支援者情報の把握に努め、想定される災害ごとの具体的な避難支援プラン（個別計画）を個々の避難行動要支援者と確認し、災害時には避難支援等を行うよう努める。

なお、避難支援者は、本人又はその家族等の生命及び身体の安全を守ることが大前提であるため、自主防災組織は、避難支援者が避難支援プラン（個別計画）に基づいて助けようとしても、助けられない可能性もあることについて、避難行動要支援者の理解を得る必要がある。

③ 自主防災活動の実施

地域の特性に応じて企画、立案した防災活動を、市民及び事業者との協働により実施していく。また、災害時に適切に行動できるよう、日頃から避難行動要支援者をはじめとしたより多くの区民等の参加のもとに実践的な防災訓練を地域ぐるみで実施する。

(3) 此花区の取組み（公助）

① 自主防災活動への支援

自主防災組織による避難行動要支援者の避難支援の取組みが効果的に進展するよう、個人情報の取扱いや具体的な支援方法を記載した活動マニュアルを提供、自主防災組織の「避難行動要支援者支援計画」作成を支援するなど、自主防災活動の支援を行う。

② 此花区保有情報に基づく避難行動要支援者情報の把握、管理

此花区が通常施策を実施するために収集している要配慮者情報を利用して、「此花区避難行動要支援者名簿※」をあらかじめ作成、毎年更新し、「避難行動要支援者支援計画」を作成するなど避難行動要支援者支援の基盤が整った地域からの要請に応じて避難支援等関係者となる自主防災組織へ避難行動要支援者情報（高齢者施設、障がい児・者施設への長期入所者については、施設管理者など避難支援者が明確であることから除くこととする。）を本人の同意を得て提供する。

※【此花区避難行動要支援者名簿作成基準】

- ・要介護3以上の人
- ・要介護2以下で認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱ以上の人
- ・重度障がい者
 - 身体障がい者 1・2 級
 - 知的障がい者 A
 - 精神障がい者 1 級
- ・視覚障がい・聴覚障がい 3・4 級
- ・音声・言語機能障がい 3 級
- ・肢体不自由（下肢・体幹機能障がい） 3 級

【利用する保有個人情報の項目】

- ・住所、氏名、性別、生年月日、電話番号その他の連絡先、避難支援等を必要とする事由、その他避難支援等の実施に関し必要と認める事項

【名簿情報の提供に際し情報漏えいを防止するために講ずる措置】

- ・大阪市が定めるプライバシー保護に配慮した具体的な実施方法を事務取扱要領による。

③ 福祉避難所の指定等

災害時における避難行動要支援者の避難生活場所として、福祉避難所の指定を行うとともに、災害時避難所の一部の部屋を避難所開設訓練等を通じ、福祉避難室として確保を図る。

第5章 防災教育・訓練

第15節 防災知識の普及・防災教育

災害による被害の軽減を図るためには、地震や地震被害、防災対策に関する正しい知識と行動力が不可欠である。また、災害時の災害応急活動を実効性のあるものとするためには、此花区役所職員および直近参集者をはじめ、防災関係機関の職員、区民等、事業者など広範な人々に防災知識を普及する必要がある。

地震による災害は広範囲にわたり、同時に多数の火災、救助・救急事象が発生するとともに、交通混乱等各種の被害が予想される。このため防災知識の普及は、まず地震等の災害が発生した場合の事象や、防災対策の基本などの防災情報を正確に理解し、此花区役所職員および直近参集者をはじめ、各防災関係機関、区民等、事業者が自らの役割を理解することが重要である。

特に、大規模地震などの災害の発生直後においては、すべての災害応急対策を防災関係機関だけで実施することは困難であることから、「自らの命は自らで守る」「自らの地域は自らで守る」ために市民等や事業者が平素から備えるべきこと、防災関係機関と市民組織や企業・団体などが分担・協力して実施すべきこと及び地域における高齢者や障がい者などの避難行動要支援者の支援に関すること等について知識の普及、啓発を行うとともに、避難生活における高齢者、障がい者、男女のニーズの違いなど多様な視点を踏まえた体制が整備されるよう努める。

また、防災知識の普及啓発は、幼児期からその発達段階に応じ学校教育及び社会教育等、あらゆる機会を通じて、市民等の防災意識の高揚と災害初動対応スキルの習得に努める。

さらに、発生する可能性が高いとされている東南海・南海地震や、南海トラフ巨大地震では、大阪にも津波が来襲することが想定されており、津波ハザードマップ等を活用した津波防災に関する知識の普及、啓発を行う。

15-1 職員に対する防災知識の普及啓発

災害は、その発生の季節、時間、地理的な条件により被害状況が異なり、また職員自らが被災者になる可能性があるなど不確定な要素が多い。特に、夜間や休日などの勤務時間外に災害が発生した場合、初期段階では参集職員数も限定され、限られた職員で対処せざるを得ない状況も予想される。

此花区役所職員および直近参集者は、このような状況下においても、災害応急活動の実行上の主体であり、平素から防災に関する知識を十分に習得し、これらの知識に基づく適切な判断力及び行動力を養うことに努め、全職員への防災教育をより一層充実させる。

(1) 此花区役所職員及び直近参集者に対する防災研修の実施

此花区役所職員を対象とした防災研修制度を確立し、危機管理意識の醸成、地域防災計画の理解、防災技術等の習得を行う。

① 此花区役所職員への防災研修

職員に対する研修において、防災研修のカリキュラムを取り入れ、防災研修を実施する。また、災害発生時に的確な情報の収集・伝達ができるよう、防災業務の流れも含めた防災情報システムの端末操作研修を定期的実施していく。なお、防災研修の一貫として、防災啓発施設等の見学研修を実施するなど、体験的な防災学習の充実を図っていく。

② 緊急区本部員等への防災研修

緊急区本部員に対する定期的な防災研修を実施する。

③ 直近参集者への防災研修

直近参集者に対する定期的な防災研修を実施する。

(2) 此花区役所職員への災害応急対策活動計画の徹底

此花区役所職員は自ら、災害応急対策活動の実行上の主体として、平素から区の各種防災マニュアル等の内容を十分に理解し、災害発生時における適切な判断力及び行動力を養う。

このため、各種マニュアルを必要に応じ見直すとともに、職員参集制度をはじめ、災害応急対策活動計画の周知徹底を図る。

「職員防災マニュアル」により災害応急対策計画の具体化を図り、これを関係全職員に配布することで、区役所職員・直近参集職員等への徹底と毎年の見直しを実施する。

15-2 区民等に対する防災知識の普及啓発

大規模地震の発生時には、出火防止、初期消火、救出、応急救護、避難誘導など広範な応急対策が必要となるが、防災関係機関の対応だけでは極めて困難となることが予想される。

このため、区民等に対しては、災害等の知識、災害への備え、災害時の行動について普及を図り、それぞれの地域の災害関連情報を周知するとともに「自らの地域は自らで守る」という自主防災意識を醸成し、さらに、高齢者や障がい者などの避難行動要支援者に対する支援の必要性、方法等の防災知識の普及を図る。また、区内に滞在及び通過する区民等に対しても、ハザードマップ等を活用するなど、此花区域における災害リスクの周知を図り防災知識の普及啓発に努める。

(1) 普及啓発の内容

① 災害等の知識

- ア 災害の態様や危険性
- イ 各防災関係機関の防災体制及び講ずる措置
- ウ 地域の地形、危険場所
- エ 過去の災害から得られた教訓の伝承
- オ 地域社会への貢献
- カ 応急対応、復旧・復興に関する知識

② 災害への備え

- ア 1週間分以上の飲料水、食料及び、携帯トイレ、トイレットペーパー等の生活物資の備蓄
- イ 非常持ち出し品(救急箱、懐中電灯、ラジオ、乾電池、食料、飲料水等)の準備
- ウ 飼い主による家庭動物との同行避難や避難所での飼養についての準備
- エ 負傷の防止や避難路の確保の観点からの家具、什器類の固定、家屋・施設・塀・擁壁の予防・安全対策
- オ 避難場所・避難路・避難所(コンクリート屋内退避所を含む。)、家族との連絡方法等の確認
- カ 住宅の耐震診断と耐震改修の必要性
- キ 自主防災組織活動、初期消火・救出訓練をはじめとした防災訓練などへの参加
- ク 地震保険、火災保険の加入の必要性

③ 災害時の行動

- ア 身の安全の確保方法
- イ 情報の入手方法
- ウ 緊急地震速報を見聞きした場合に具体的にとるべき行動
- エ 津波発生時(大きな長い揺れが継続した場合)にとるべき行動

- オ 地震発生時における自動車運転者が注意すべき事項
- カ 避難行動要支援者への支援
- キ 初期消火、救出救護活動
- ク 心肺蘇生法、応急手当の方法
- ケ 避難生活に関する知識
- コ 自らの安全を確保の上、応急対応等の防災活動への参加
- サ 自らの被害が軽微であった場合の生活物資等の提供等の協力
- シ 災害緊急事態が布告され、内閣総理大臣から物資の買占めの自粛等の協力要請があった場合の協力

(2) 普及啓発の方法

① 講演会、説明会等による防災知識の普及

防災とボランティアの日、防災の日、津波防災の日など、年間を通じて機会をとらまえ、講演会、説明会、座談会等を実施して、区民等の防災知識の普及を図るほか、視聴覚教材や各種の起震車等を使用して体験的に防災行動能力の向上を図る。

② 地域イベントにおける啓発活動

地域で開催される各種イベントにおいて、説明会・体験会・チラシの配布等、を実施することにより防災知識の普及に努める

③ 印刷物による防災知識の普及

ア 防災啓発チラシの配付

区民等、自主防災組織等を対象とした防災啓発チラシを配付し、防災知識の普及に努めている。特に、高齢者や障がい者等の避難行動要支援者に対する支援など、平常時、災害発生時の隣近所、地域における助け合いの啓発を行う。

イ ハザードマップ等の配布

地震動や津波、河川氾濫等の自然災害に関するリスクを分かりやすく図示したハザードマップは、市民等の防災意識や防災力の向上に資するものであることから、危機管理室と協力しその作成・配布等を行う。

ウ 市民防災マニュアルの利活用

区民等が自発的・主体的に防災活動に取り組むことができるように危機管理室が作成した「市民防災マニュアル」を全戸配布することで広く区民等に周知を図るとともに、区民等を対象とした研修会やワークショップなどでも積極的に活用し、区民等の防災意識の高揚を図り、地域における自主防災活動の活性化に努める。

④ インターネットを活用した防災知識の普及

此花区役所が設けるホームページにおいて防災情報を提供するとともに、トップページ等において各情報に効率的なリンクを設定することによって、防災知識の普及に努める。

(3) 津波に対する知識の普及啓発

様々な機会を活用し、連携しながら、発災時、一人ひとりが主体的に迅速かつ的確に避難できるよう、津波に対する知識の普及啓発、逃げるために必要な情報提供体制、要配慮者を考慮した避難誘導を含む防災訓練を一体的に実施するほか、避難場所・避難路の確保等、津波から「逃げる」ための対策に総合的に取り組む。

① 津波に対する基本的事項

- ア 我が国の沿岸はどこでも津波が来襲する可能性があり、強い揺れを感じたとき又は弱い揺れであっても長い時間ゆっくりとした揺れを感じたときは、迷うことなく迅速かつ自主的に高い場所に避難すること
- イ 避難にあたっては徒歩によることを原則とすること、自ら率先して避難行動をとることが、他の地域住民の避難を促すことなど、避難行動に関すること
- ウ 津波の第一波は引き波だけでなく、押し波から始まることもあること
- エ 第二波、第三波などの後続波の方が大きくなる可能性や数時間から場合によっては一日以上にわたり継続する可能性があること
- オ 避難した後、すぐに自宅に戻らないこと
- カ 浸水域や浸水深は、津波の第一波ではなく、第二波以降に最大となる可能性があること
- キ 地盤沈下、液状化等により、津波が去った後も海水が残り、長期間に渡って湛水する可能性があること
- ク 強い揺れを伴わず、危険を体感しないままに押し寄せる、いわゆる津波地震や遠地地震の発生の可能性など津波に関すること
- ケ 地震・津波は自然現象であり、想定を超える可能性があること、震災直後に発表される津波警報等の精度には、一定の限界があること、避難場所の孤立や避難場所自体の被災もありうることなど、津波に関する想定・予測の不確実性があること

② 教育機関における防災教育

教育機関においては、住んでいる地域の特徴や過去の津波の教訓等について継続的な防災教育に努める。

③ 区民等への普及啓発

- ア 津波浸水想定の結果を踏まえ、啓発ポータルサイト等を活用した区民等への啓発を行う。
- イ 当該津波浸水想定を踏まえて避難場所、避難路等を示す津波ハザードマップの整備を行い、区民等に対し周知する。
- ウ 津波ハザードマップが区民等の避難に有効に活用されるよう、住民参加型のワークショップを行うなど、その内容を十分検討する。

15-3 乳幼児・児童・生徒等に対する防火・防災教育

防災意識を高め、それを次世代へ着実に継承していくためには、学校園における防災教育が重要である。学校園は、児童・生徒の安全を守るとともに、今後、地域防災の主体を担い、防災活動に大きな役割を果たすことができる人材を育成するよう、各教科、道徳、特別活動等の指導における副読本等の教材・資料の作成、避難訓練や応急措置等の充実を図り、乳幼児・児童・生徒の発達段階や学校園等の実態に応じた防災教育を実施する。

(1) 学校園等における安全教育

「防災に関する指導については、教育活動を通して計画的・継続的に実施し、さまざまな災害発生時における危険と正しい備え、安全に避難する方法など防災教育の基礎となる基本的な知識が身につくよう適切な指導に努める。」「自然災害等の危険に際しては、『滅災』の考え方を踏まえ、幼児・児童・生徒が状況に応じて、自らの命を守り抜くため主体的に行動するとともに、他の人や地域社会の安全に貢献できるよう資質や能力を養うように努める。」（平成24年度学校教育指針より）という立場で実施するとともに、地域社会の一員としての自覚の育成に努める。

① 学校園等での安全教育

各校園及び保育所等においては、各教科・道徳（小・中）・日常の保育での安全に関する学習、特別活動の学級活動（ホームルーム活動）や学校行事など、全教育活動等を通じて安全教育を実施する。区役所はこれに積極的に協力・支援を行う。

② 学校園等への防災指導

自主防災組織等との連携を支援する。小学校の児童に図画の出品を依頼し、一般防災知識の普及啓発を行う。

(2) 乳幼児・児童・生徒向け防火・防災教材の活用

乳幼児・児童・生徒の発達段階や此花区の地域的条件に応じた防災教材の利用により、効果的な校園及び保育所等における防災教育を実施する。此花区はこれに積極的に協力・支援を行う。

① 従来から作成しているパンフレットや文部科学省等の作成する防災教材を配付し、防火・防災教材としての活用を継続する。

② 市民防災マニュアルを配布し、各校園及び保育所等が実施する安全教育への活用に資する。

15-4 事業所等における防災教育

(1) 事業所等における取組み

事業者は、災害時に企業の果たす役割（生命の安全確保、二次災害の防止、事業の継続、地域貢献・地域との共生）を十分に認識し、被災による業務中断という事態に積極的に備えていくため、あらかじめ想定されるリスクが発生した場合に事業者が遂行する重要業務を継続するための事業継続計画（BCP）を策定し、運用するよう、努める。また、東日本大震災では、被災地はもとより、サプライチェーンの寸断により、経済活動への影響が全国に及ぶなど、経済活動が直接の取引先との間で完結するものでなく、サプライチェーンを通じて、広く連鎖すること等が明らかとなったことを踏まえ、防災体制の整備、従業員の安否確認体制の整備、必要な物資・資機材の備蓄や防災用品の整備、防災訓練、予想被害からの復旧計画の策定、各計画の点検・見直し、燃料・電力等重要なライフラインの供給不足への対応、取引先とのサプライチェーンの確保等の事業継続上の取組みを継続的に実施するなど、事業継続マネジメント（BCM）※の取組みを通じて、防災活動の推進に努める。

特に、食料、飲料水、生活必需品を提供する事業者など災害応急対策等に係る業務に従事する企業は、府及び市町村との物資等提供の協定締結、地域の防災訓練等の防災施策の実施に協力するよう努める。

※ 事業継続マネジメント（BCM）

BCP策定や維持・更新、事業継続を実現するための予算・資源の確保、対策の実施、取組を浸透させるための教育・訓練の実施、点検、継続的な改善などを行う平常時からのマネジメント活動のこと。経営レベルの戦略的活動として位置付けられる。（引用：内閣府作成事業継続ガイドラインより）

(2) 此花区の取組み

此花区は、事業者の事業継続計画（BCP）の策定、事業継続マネジメント（BCM）の実施や防災活動を促進するため、大阪市をはじめ経済団体や企業防災活動を支援する団体等とも協力し、広報・啓発や必要な情報提供等の支援に努めるとともに、事業者による従業員の防災意識の高揚を図る取組みを支援する。

15-5 防災教育環境の充実

(1) 計画の目的

「災害に強い人づくり」のため、各種の防災教育や防災訓練、防災マニュアル教材の作成等の企画・実施に努める。

(2) 計画の内容

① 防災研修の企画・実施

此花区役所職員（緊急本部員、緊急区本部員を含む）及び直近参集者、地域防災リーダー、ボランティアリーダー等に対する防災研修等の企画、実施に努める。

② 防災訓練の企画・実施

此花区役所が実施する各種防災訓練の企画、調整を行う。また、各地域の自主防災組織が実施する各種防災訓練の企画に際し助言する。

③ 区民向け、児童・生徒向け防災教育用教材等の企画・作成

区民向けや企業向け、避難行動要支援者などの各種防災マニュアルの企画や作成、乳幼児・児童・生徒向けの発達年齢に応じた防災教材の企画や作成、また区役所職員および直近参集者の防災研修用資料等の企画・作成に努める。

④ 防災イベント等の企画・実施

此花区役所が実施する各種防災イベントの企画、調整を行う。

第16節 防災訓練の実施

防災知識や防災技術は、普段の訓練の積み重ねで実際に体を動かすことにより災害発生時などの緊急時に大きな期待ができる。実践的な防災訓練は、計画を熟知し災害時の対応能力を高め、区民等・事業者・防災関係機関・ボランティア及び行政機関の連携協体制を確立するのに大きな効果があるほか、区民等に対する防災知識の普及や防災対応行動力の向上の効果が期待できる。

此花区においては、大阪市やその他の関係機関と協力した防災訓練をはじめ、区を中心とした防災訓練、自主防災組織を中心とした防災訓練を実施する。そのなかで、災害実態を考慮した新しい形態による実践的な訓練を積極的に実施する。

各種防災訓練においては、区民等・事業者・行政機関、その他の防災関係機関が協力して参加し、災害時における各々の防災的な役割について相互に理解するとともに防災技術の習得、広範な区民等への防災意識の啓発を行う。また、訓練結果の分析評価を行い、防災対策の充実を図る。

特に、自主防災組織を中心とした防災訓練は、区民等自らの発意により企画、実施ができる体制を推進し、きめ細かく実践的な訓練やイベント性を取り入れた楽しい訓練などにより広範な区民等の参加を求め、「自らの地域は自らで守る」という意識の高揚と具体的な防災知識・技術の習得を目指す。実施にあたっては、訓練の目的を具体的に設定した上で、各種災害に関する被害の想定を明らかにするとともに、あらかじめ設定した訓練成果が得られるように訓練参加者、使用する器材及び実施時間の訓練環境などについて具体的な設定を行うなど実践的な内容とする。訓練後には訓練成果を取りまとめ、課題を明らかにし、必要に応じ防災組織体制の改善を行うとともに、次回の訓練に反映させる。

16-1 此花区役所における防災訓練の実施

(1) 大阪市総合防災訓練

大阪市総合防災訓練は、市域内において、地震災害・風水害等の広域複合災害が発生した場合を想定して、避難誘導、初期消火、救出・救護、消防・警察・自衛隊による合同訓練、ライフライン復旧訓練

等を実施することにより、市民等の防災意識の高揚、防災関係機関の相互協力体制の確立を目指すものである。

此花区役所においても、この訓練に積極的に参加し、自身の災害時の行動を確認するとともに、災害発生時における各関係機関の相互協力関係を確認する。

(2) 大阪市震災総合訓練

大阪市震災総合訓練は、大地震が発生したとの想定のもと、勤務時間外の場合に備えての、職員の非常参集や災害対策本部の設置運用の訓練等を実施することにより、初期初動体制の充実、職員の防災意識の高揚を図るものである。

この訓練では、大地震が発生したとの想定のもと、緊急本部員、緊急区本部員をはじめ、全所属を対象として徒歩等による非常参集訓練を実施するとともに、防災情報システムや防災行政無線等を活用し、市本部や区本部の設置訓練及び市本部と各部、各区本部、防災関係機関等との情報収集伝達訓練を実施する。

此花区役所においても、この訓練を此花区本部設置訓練として積極的に参加する。

(3) 区震災訓練

区震災訓練は、発災初期及び災害応急対策初期における支援を要する人や被災者の人命の安全確保・生命の維持に重点を置き、区民等を中心とした訓練を実施することにより、区本部や自主防災組織の防災活動の円滑化に努め、かつ区民等の防災意識の高揚を図るものである。

区震災訓練には広く地域住民等の参加を求め、地域防災リーダーを中心とした訓練、また地域に配備した資機材や無線機を活用した訓練を取り入れる。

また、区役所、消防、警察、防災関係機関が連携して初期消火、救出・救護、避難誘導訓練等を実施し、地域防災リーダーが日頃の訓練成果を発揮するため地域住民等を指導し、多くの地域住民等が直接参加する実践に即した訓練を行う。

訓練の実施に際しては、できるだけ高齢者や障がい者等の支援を要する者も参加できるよう配慮し、地域住民等の連帯感の形成と熟練を図ることに努める。

① 消火・救出訓練

地域に配備された消火、救出救護用資器材を利用した訓練を実施する

② 避難誘導訓練

地域防災リーダーと区職員、警察等が一体となった避難誘導訓練を実施する。

③ 情報交換訓練

地域防災リーダー等が防災行政無線を使用した、区本部との情報交換訓練を実施する。

④ 給食・給水訓練

地域防災リーダー等が行政機関等から提供された飲料水や炊き出しによる食料の配給訓練を実施する。

(4) 津波防災訓練

津波防災訓練は、大阪府に大津波警報や津波警報が発表された場合を想定し、民間鉄扉管理者にも参加を呼びかけて防潮扉等の閉鎖訓練等を行うとともに、防潮扉及び水門を迅速かつ確実に閉鎖できるように初期初動体制の充実、職員及び区民等の防災意識向上を図るものである。

この訓練では、民間鉄扉管理者を含めた防潮扉等の閉鎖訓練、情報伝達・収集訓練、無線訓練、救出・

救助訓練、医療救護訓練、住民参加による実働型の避難訓練を実施し、防潮扉及び水門を迅速かつ確実に閉鎖できるように初期初動体制の充実を図るとともに、非常時の連絡、協力体制の確立を図る。

訓練の開催にあたっては、区役所・消防・警察・区自主防災組織が協力して実施するほか水防団とも協力を行う。

(5) 緊急区本部員に対する訓練

この訓練は、緊急区本部員として指名された職員に対し、区災害対策本部長を補佐する業務に習熟するために実施するものである。

この訓練では、災害が発生し、または災害が発生するおそれがある場合に迅速的確に初期初動体制の確立を図るために実施される訓練、講習会、講演会等に、緊急区本部員が参加し防災技術等を習得する。

① 大阪市震災総合訓練への参加

非常参集、災害対策本部設置運用等の非常参集訓練及び、避難所の開設、被害状況の把握、避難誘導等の大阪市震災総合訓練に参加する。

② 通信訓練への参加

総合防災情報システム、防災行政無線、無線ファクシミリを使用した一斉通報、個別通信等の通信訓練に参加する。

③ 区震災訓練への参加

市内において大規模な被害が発生したことを想定し、防災関係機関及び地域住民等が一体となった区の震災訓練に参加する。

(6) 計画停電への対応訓練

東日本大震災での事例を踏まえ、万が一の不測の事態が発生した場合に、万全の対策を講じることができるようマニュアルを作成し、計画停電対応訓練を実施する。

16-2 区民等・事業所における防災訓練の実施

災害時にあっては、区民等や事業所による独自の初期消火、救出救護、避難誘導等の活動により被害の軽減を図る必要がある。

したがって、区民等、事業所が「自らの命は自ら守り、自らの地域は自らで守る」という防災の基本に立って適切な活動が行えるよう、初期消火、避難訓練等を中心に実践的な防災訓練を実施する。

また、大規模災害時の減災には「自助」「共助」による地域防災活動が不可欠であり、日頃から、地域ぐるみで防災や減災の取り組みができるよう、地域住民が主体となった実践的な訓練を実施することも重要であるため、地域によって異なる災害特性や被害想定に関する情報提供を行うなど、地域特性に応じた訓練を進めるための支援を引き続き行っていく。

(1) 地域の防災訓練

地域の防災訓練は、地域防災リーダーが中心となり地域での防災訓練を行い、一人でも多くの地域内の人々が防災活動に必要な知識や技術の習得を図るために実施する。

この訓練では、部分訓練（可搬式ポンプや携帯無線機など防災資機材の知識や使用方法など）、個別訓練（情報連絡、消火、救出・救護、避難誘導給食給水訓練）、総合訓練（各種訓練の組合せ）等を、区役所、消防署等の協力のもと地域独自で計画を策定するよう努める。

また、図上訓練等を実施し、災害時にはどのような行動が必要か、また、どのような物資・資機材等が必要かなどを普段から明確にしておくため、区役所等の支援により地域におけるマニュアル等の作成

に努める。

(2) 事業所の防災訓練

事業所は地域にあっては地域社会の一員として、積極的に自らの施設や財産、従業員等の生命や身体の安全の確保と周辺地域の防災のため、全従業員が協力して被害の軽減と二次災害の防止を図るため、防災訓練を実施する。

- ① 事業所はその規模や条件に応じて、災害発生時の火元責任者、火元係、消火係、避難誘導係、通信連絡係、救護係などを編成し訓練を実施し、個々の職員の災害発生時の役割を習熟するように努める。
- ② 事業所は地域社会の一員として、区震災訓練や地域の防災訓練に積極的に参加し、初期消火、救出救護、避難誘導などを自主防災組織と協力して実施できる体制づくりに努める

第6章 生活物資

第17節 生活物資の確保

大阪府が公表した南海トラフ巨大地震の被害想定によると、大阪市域では避難者数が約82万人となっており、此花区でも3万4千人を超える。この避難者に対する生活関連物資等の備蓄及び災害時の要配慮者へ配慮した備蓄計画について、大阪府・大阪市など関係機関とともに連携し、策定する。

備蓄方法に関しては地区拠点を設け分散備蓄を行い、需要に応じた柔軟な供給を可能にすることとする。避難生活が長期化する場合は、流通備蓄や援助物資等による供給を基本とする。

災害により一時的に都市機能が不全になることを想定し、避難所等における区民の最低限の生活を維持することを目的に、以下の5つの観点から生活物資を確保する。

- 1) 飲料水等の確保
- 2) 生活雑用水の確保
- 3) 食料の確保
- 4) 生活必需品の確保
- 5) し尿処理に関する事前準備

これらの備蓄物資については、要配慮者や、男女等のニーズの違いに配慮するとともに、ニーズに応じて品目の拡大を図っていく。また、備蓄体制については、災害時、輸送が困難になる状況を考慮し、市内をいくつかのブロックに分け、ブロックごとに備蓄拠点となる倉庫を設置するなど分散備蓄体制を整備しており、今後、さらに、避難生活が長期化する場合に生活関連物資等に関して、大阪市が主体となって種々の機関等との協定を締結し、流通備蓄等による柔軟な対応を図っていく。

17-1 飲料水等の確保

災害後、生命維持の上から最低限必要な飲料水を最優先して確保する必要がある。また、長引く避難生活や都市機能の復旧に伴い、日増しに需要の高まる生活用水等の供給体制を確立するとともに、供給体制を補完する方策として、流通備蓄等からの調達を図る。

17-2 生活雑用水の確保

災害後一定の期間を経過すると、水洗トイレ等の生活雑用水の急激な需要増が想定される。このため、水道による生活用水の供給体制を補完する観点から、生活雑用水を確保することは有効であり、施設・資器材の整備が必要となる。

下水処理場、農業用井戸及び学校のプールの水を近隣の地域に利用可能にするための施設・資器材の整備等を図っていく。

17-3 食料の確保

災害直後は食品流通機能が麻痺することも想定されるので、被災者に対して食料の配給が可能なように、平時から備蓄による食料の確保を推進する。その後は大阪市や府からの供給や流通備蓄からの調達及び他都市からの援助物資等で賄う。

災害時の被災者に対する食料は、震災直後については煮炊き不要な食品による供給とする。この方針に従い、現状の食料備蓄の主品目であるアルファ化米に加え、乾パン（ビスケット）、高齢者食、粉ミルク等を組み合わせ、備蓄を行っていく。

17-4 生活必需品の確保

生活必需品は、火災・倒壊等により生活必需品を失った被災者の避難所での生活を支援するため、生活必需品の備蓄等により確保を図り、災害直後すぐに必要な品目と、その後の避難生活の維持に必要な品目とに区分する。

17-5 し尿処理に関する事前準備

災害時の断水等により水洗トイレが使えない場合に備え、広域避難場所、災害時避難所等におけるし尿処理に関しては、備蓄トイレやレンタルの仮設トイレの設置及び下水道施設の活用により対応する。

また、上水道、下水道、電力等ライフラインの被害想定等を勘案し、し尿の収集処理見込み量及び仮設トイレの必要数を把握する。

災害時には、広域避難場所、災害時避難所等に備蓄トイレやレンタルの仮設トイレを設置するため、大阪市と協力しその備蓄や確保に努める。

17-6 家庭・職場における備蓄

災害時には、都市機能の不全による生活物資の確保が困難になる事や、多数の帰宅困難者が出ると予想されることから、家庭や事業所において、生活物資の備蓄を行うよう啓発していく。

(1) 啓発活動

「自らの命は自らで守る」、「自らの地域は自らで守る」という観点から、家庭及び事業所における必要最低限の備蓄を呼び掛ける。

(2) 備蓄内容

家庭においては、災害直後に最低限必要な1週間分以上の飲料水・食料等の備蓄を行うよう啓発活動を進めていく。

事業所においても、帰宅困難者の発生を想定し、帰宅するまでの一時的な食料、飲料水、毛布の備蓄を啓発していく。

第18節 供給体制

大阪市等と協力し、区民等に対して飲料水、食料、生活関連物資の安定供給を行い、生活の安定を図る体制の整備を図る。被災地で求められる物資は、時間の経過とともに変化することを留意し、広域的な受援も視野に入れた物資の調達に努めるとともに、必要に応じて共同備蓄や備蓄の相互融通を行う。

また、在宅での避難者、応急仮設住宅で暮らす避難者、所在が確認できる広域避難者など、避難所に滞在できない被災者に対しても物資等が供給されるよう努める。

18-1 応急給水

(1) 応急給水の実施

大阪市水道部が行う応急給水の実施について、区本部および自主防災組織が協力し、業務の迅速化に努める。

18-2 食料の供給

災害による電気、ガス、水道等のライフライン機能の停止や食料供給機能の混乱により、区民等の食料供給に重大な支障が生じたとき、被災者に速やかに食料の安定供給を行い、区民生活の安定を図る。

(1) 食料供給の方針

① 食料供給の順位

食料供給は次の順位で行うが、状況により異なった順位で、また、並行して行うことができる。

- ア 災害対策用備蓄食料（煮炊不要食（アルファ化米）、乾パン（ビスケット）等）
- イ 流通業者等からの調達食料（弁当、パン等の既製食品）
- ウ 米穀小売業者等からの調達食料

② 食料供給の対象者

- ア 避難所に受入された者
- イ 住家に被害があり、炊事できない者（在宅避難者）
- ウ 通勤・通学者、旅行者等

なお、避難所に受入されていない上記イ、ウの者に対しては、避難所における食料供給ができるよう対策を講じる。

③ 食料供給の品目

供給品目は、煮炊不要食（アルファ化米）、乾パン（ビスケット）、お粥等、弁当、パン、粉ミルク、米穀、副食等とする。

④ 食料の調達方法

区本部長は、応急食料の供給が必要と認める場合は、備蓄食料の活用、既製食品・米穀の調達等により対応するが、それが困難な場合、市本部に食料調達の要請を行うものとする。

⑤ 食料供給の実施方法

ア 食料供給の場所

食料供給の場所は、原則として災害時避難所とする。

イ 食料供給の実施

食料供給は、区本部が自主防災組織等の協力を得て行うものとする。また、食料の配給については被災者自らが行うこととするが、支援を要する者については配慮する。

ウ 給食施設の活用

炊き出しを行う場合、学校等の給食施設については、施設管理者と十分協議のうえその活用を図る。

(2) 災害対策要員の飲料水・食料の確保

災害対策に従事する職員等の飲料水・食料については、次によりその確保を図るものとする。

① 飲料水

区本部長は市本部総務部長へ職員等の飲料水の確保について依頼を行う。総務部長は水道部長と協議し、必要な場所に飲料水を供給するものとする。

② 食料

区本部長は市本部総務部長へ職員等の食料の確保について依頼を行う。総務部長は、市民部長、市場部長、及び契約管財部長と協議し、食料を調達するものとする。

食料の内容等については、災害対策業務に従事する職員等の業務内容（労働の程度、労働時間等）、人員に応じ確保する。

18-3 生活物資の供給

災害による住家被害等により、日常生活に欠くことのできない被服、寝具その他の衣料品及び生活必需品を喪失又はき損したことにより、直ちに日常生活を営むことが困難な者に対して、被服、寝具その他の衣料品及び生活必需品を給与又は貸与する。

(1) 実施体制

災害救助法が適用された場合、同法の規定に基づく被災者に対する衣料・生活必需品の給与又は貸与は、原則として区本部長が実施する。ただし、災害救助法が適用されない災害においては、被災の実情に応じ適宜同法に定める基準の範囲内で物資の給与又は貸与を行う。

(2) 衣料・生活必需品の給与又は貸与を受ける者

- ① 災害により住家に被災を受けた者等であること。被災の程度は、全壊、全焼、流失、半壊、半焼及び床上浸水であること
- ② 被服、寝具、その他生活上必要最小限度の家財を喪失又はき損した者
- ③ 被服、寝具、その他生活必需品がないため日常生活を営むことの困難な者

(3) 生活必需物資の備蓄品目種類

被服、寝具その他生活必需物資の品目は、おおむね次のとおりである。

寝具（毛布）、肌着、身回り品（生理用品等）、日用品セット（石鹸、歯ブラシ、タオル、コップ等）、トイレットペーパー、大人・幼児用紙オムツ、杖等その他として、ラジオ、懐中電灯、防水シート、ポータブルトイレ、間仕切り等

(4) 生活必需品の調達

区本部長は、必要のある場合において市民部長に生活必需品等の調達を要請する。

第7章 遺体処理

第19節 遺体処理

19-1 遺体の仮収容（安置）所の設置

- (1) 区本部は災害が発生した場合に備えて、遺体仮収容（安置）所として利用できる区内にあるできるだけ堅牢な構造の公共施設、寺院等の管理者と協議を行い、遺体収容に適当な場所を確保する。
- (2) 区本部は検視・検案場所は府警察と十分調整を行い、可能な限り遺体仮収容（安置）所に近接した場所に設置する。
- (3) 大規模な災害により多数の遺体が発生した場合は、危機管理部が、遺体仮収容（安置）所、検視・検案場所の設置について、区本部、府警察、葬儀業者と総合調整を行う。
- (4) 区本部は遺体仮収容（安置）所の設置に当たっては、葬儀業者と連携して納棺用品等必要器材を確保する。
- (5) 区本部は不足する遺体仮収容（安置）所、棺桶、納骨壺、ドライアイス及び搬送車両の確保を危機管理部に要請する。
- (6) 区本部は、遺体仮収容（安置）所の設置及び管理運営に当たっては、必要に応じて自主防災組織、ボランティア等の協力を得て実施する。
- (7) 区本部は、警察等と緊密な連携を図り、遺体仮収容（安置）所に隣接する場所に、検視・検案場所を確保する。また、遺体処置に必要な水、電源の確保に努める。
- (8) 遺体安置所には責任者を配置するほか、来訪する遺族等への対応及び衛生状態を確保する要員、葬祭扶助等に関する相談のための福祉担当者等の配置についても検討しておく。
- (9) 警察から引継がれた遺品や遺体の着衣、携行品等については、他の遺品と混在、紛失がないように、散逸防止等の措置をとる。
- (10) 死亡の届出義務者がいない場合や外国籍の死亡者等については、所管する法務局担当者と協議、調整を行う。

19-2 遺体の収容

発見された遺体は、検視・検案場所において、警察官又は海上保安官の検視（死体調査）及び医師による検案を受けたのち、遺体仮収容（安置）所に搬送する。

ただし、警察官又は海上保安官が検視等を終えたのちにおいて、身元が判明し、災害死によることが明らかである場合には、当該遺体は警察官又は海上保安官から遺族等に引き渡される。

身元不明及び身元が判明するも引き渡し先のない遺体は、警察官又は海上保安官が身元確認に必要な資料を収集し、区役所職員に引き継がれた後火葬を行う。

19-3 遺体の処理・身元確認等

(1) 遺体の処理

検視・検案が終了し、遺体仮収容（安置）所に収容された遺体は、必要に応じ、洗浄、縫合、消毒等の処置を行い、納棺のうえ一時保管する。

また、災害に関連して亡くなった可能性がある人の遺体は、警察による検視（死体調査）、医師による検案を経なければ埋火葬できないことから、安易に医師の死亡診断書で遺体を埋火葬することがないように留意する。

なお、遺族が遺体の処理、火葬等を行うことが困難もしくは不可能である場合は、市町村が代わってこれを実施する。

- ① 遺体の洗浄、消毒等の処置を行う。
- ② 遺体の火葬、遺族等に対する棺、骨つぼ等の支給など、必要な措置を講ずる。
- ③ 必要に応じて民間の葬儀社と連携し、遺体の処理やドライアイス等の遺体の安置に必要な資機材の確保、遺体保管・運搬体制の整備及び棺の確保に努める。

(2) 遺体の引取り・身元確認

- ① 身元が判明し遺族等の引取人がある場合には、警察が遺体を引き渡す。遺体の引取りがあった場合には、遺体処理台帳に必要事項を記入する。
- ② 収容された遺体のうち身元が不明で、一定期間経過後、なお引取人がいない場合には、行旅死亡人として扱う。
- ③ 行方不明者、身元不明者及び葬送に関する総合的な相談窓口を区本部に設置する。
- ④ 身元不明の遺体については、府警察、その他関係機関に連絡し、その調査にあたる。

第8章 広聴

第20節 広聴

災害発生時において甚大な被害が生じた場合、人心の動揺、混乱や情報不足・誤報などにより社会不安が生じるおそれがあるため、被災者の生活相談や援助業務等に関する広聴活動を行い、応急対策・復旧対策に区民等の要望等を反映させるために実施する。

20-1 広聴体制

臨時相談所の開設・運営

区本部は、被災者の要望等を把握するため、必要に応じて被災地域の公共施設や災害時避難所に臨時相談所を設置するものとする。

なお、臨時相談所の開設にあたっては危機管理部へ報告する。

20-2 要望等の処理

- (1) 区本部は、相談内容、要望・意見等を聴取し、速やかに各機関へ連絡し、早期解決に努力する。
- (2) 区本部は、処理方法の正確性及び統一性を図るため、あらかじめ定められた聴取用紙を用いて要望等を記入する。
- (3) 区本部は要望内容・件数、処理内容・件数を定期的に市本部（危機管理部）に報告する。ただし、急を要する場合には、市本部にFAX等により速報する。

第9章 義援金品

第21節 義援金品

21-1 義援金

此花区に対し各方面から寄託される義援金の受付及びこれらの配分は、次のとおり行う。

(1) 義援金の受付

義援金の受付窓口を、区本部に開設して受け付ける。

区本部に届けられた義援金は区本部庶務班において受け付け、区本部長名の受領書を発行のうえ、一時保管する。

(2) 義援金の配分

一時保管した義援金は大阪市市民部でとりまとめ、配分にあたっては配分委員会を設置し、配分方法を決定し、被災者に対する円滑な配分を行う。

21-2 義援品

此花区に各方面から寄託される義援品は、以下の方針で受け付け、配分を行う。

(1) 義援品の受入れの原則

- ① 義援品を募集する場合は、必要品目を特定したうえで実施する。
- ② 仕分け作業が発生した場合は、災害の状況に応じて、被災地外の市町村等に集積、整理を要請する。

(2) 義援品の受入れ

区本部に届けられた義援品は、区本部庶務班において受け付け、区本部長名の受領書を発行し受け入れ、その数量、内容等を大阪市市民部に報告する。

(3) 義援品の配分

受領した義援品は、生活関連物資の供給計画に準じて被災者に配分する。

第10章 被災・罹災の証明

第22節 被災・罹災の証明

災害援護資金の貸付や被災者生活再建支援金の支給、その他各種支援措置の適用にあたって必要とされる住家の被害認定のため、損壊家屋については区長が被災証明書を、火災・消火損については消防署長が罹災証明書を発行する。

区本部及び消防署は、被災した家屋を調査し、被害認定の基準又は「火災に関する証明書等の取扱要綱」に従って証明する。

災害時に被災・罹災証明書の交付が遅滞なく行われるよう、住家被害の調査に従事する職員の育成のため、府が実施する家屋被害認定担当者向けの研修へ参加するなど、災害時の家屋被害認定の迅速化と適正化を図るとともに、他の地方公共団体や民間団体との応援協定の締結等を計画的に進めることや、各種の支援措置を早期に実施するため、被災・罹災証明書の交付を区役所等で迅速に行うためのシステムを導入し、必要な業務の実施体制の確保に努める。

また、必要に応じて、個々の被災者の被害の状況や各種の支援措置の実施状況、配慮を要する事項等を一元的に集約した被災者台帳を作成し、被災者援護の総合的かつ効率的な実施に努めるものとする。